チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能

【Ｎコード】
Ｎ９５９６Ｐ

【作者名】
ハル

【あらすじ】
神（美少女）に殺されました・・・よし、ヤッてろう。
え？　願いを好きなだけ叶えてくれるって？　・・・うん、許す♪
チートな能力をもらった主人公、鷲羽神伽（わしゅうじんが）は『ネギま！』の世界へと旅立ったーーー原作主人公のフラグ？　成長？　まぁなる様になるでしょ、修正力で。……あれば、だけど

＊この作品は主人公チート物です、かね？　　それと作者には文才

がありません。それでもよければ見て下さい

ＰＶ２０万突破！　ユニーク４万突破！

おぉオリ主よ、死んでしまうとはなさけｎ「おまえのせいだろうがーーー！！」

初の二次創作です。
作者には文才が皆無です。
それでもよければ見て下さい

おぉオリ主よ、死んでしまうとはなさけｎ「おまえのせいだろうがーーー！！」

はろーはろー初めまして。俺の名前は神伽！　　鷲羽神伽だ！
　よろしくな！
……などとどこぞの元気爆発主人公みたいな事を言ってみても状況は変わんないよな。よし、状況確認（どくしゃのみなさま）のために昨日の事を思い出してみようか。

俺は昼間は大学生をしている。
え、夜は何してるかって？　　……そ、それはご想像にお任せする。
決して「カッコつけて言ったら真面目に追及されて困ってる」ってわけじゃないんだからね！

……コホン。それで昨日、俺が部屋でゲーム（コンシューマ版）をしていた時の事なんだが……そこから記憶がない。
何があったのか、そしてここどこなのだろう。唯一分かるのは、ここは現実ではないということぐらいだ。
だっていかにも「異空間ですっ♪」ていう雰囲気だもん。

「ここは　『天の上（かみさまのすむせかい）にあるもの』ですよ、神伽さん」

不意に背後から聞こえる声に、読心術かっ！　　なんてツッコ

ミながら振り返る……と……

「……どちら様でしょうか、美しいおぜうさん」

目の前にいたのは女の子。それも超☆美☆少☆女☆だ！
そのあまりの可愛さについ俺の紳士スキル（変態という名の）が発動してしまうほどだ。ちなみにランクはＥＸ！

俺より少し小さい女の子。
腰まで伸びた髪は清廉さを伺わせる象徴であり、見るものの心を癒すようだ。
彼女の肌は白磁の人形のごとく美しく、空と海の境界の様に幻想的な色の髪をしている。
前髪で目元が隠れている顔を朱に染めた彼女は、恥ずかしそうに言葉をかけてくる。

……ハッ！　　つい説明してしまった！
こ、これが美少女の力か！？（違います）

「お、お嬢さんですか……。そんなこと言われたの、初めてです。何げに恥ずかしいものですね」

「ほう、そうなのですか？　　それであなたは？」

思わず紳士口調（変態という名の。大事な事なので二回言いました）
なうになってしまったじゃないか！

「あ、申し遅れました！　私は神様をやっている柚というものでしゅ！！」

か、噛んだ……だと？　キターーーーーーー！！！
K☆I☆T☆A☆！
なにこれヤバイ可愛い！！　リアルに存在したのか！

「……って、神様？　神様がなんで」

一瞬イヤ～な予感が頭をよぎる。あるぇ～？
こんな展開二次創作で見たぞ？　確か主人公が死んで……
いやまさか。

「その、お気の毒ですが……あなたは死んでしまいました」

わーーぉ、驚愕の爆弾発言。てか、やっぱり？

「な、なんで、え？　俺が、死んだ……うそ？」

でもやっぱり信じられない……。俺が死んだ？　何かの冗談とかじゃなくて？

「あの、信じられない気持ちは分かりますけど、全て真実です。残酷ですが、受け止めてください」

「ちょっ、待ってくれ！　納得いかねぇよ、なんで俺死んだんだ？　それくらい教えてくれないか？」

すると途端に気まずそうな顔になる柚とかいう神様。なじぇ？

「……怒りません？」

不安げな顔＆ａｍｐ；上目遣いで聞いてくるので速攻で、

「もちろんじゃないか♪」

笑顔で答えてしまった。反省はしている、でも後悔はしていないｗ

「は、はい。あの、実は私があなたの死亡日を間違えてしまって。具体的にはあなたの住んでる地域だけに震度８の地震と断層、それ

に2億Vの落雷が。それで……」

「お前のせいかぁぁーーーー！」

いくら紳士でもね、キレていい一線てあると思うんだ。（生徒会副会長談※微妙に違う※）。てかやり過ぎだろ！　なんですか地震と断層と落雷て！　うっかりテヘッ♪じゃすまねぇぞ！？

「すいませんすいませんすいません！！すいま「そんなんで俺が許すとおもっt」あの、お詫びと言ってはなんですが、願いを好きなだけ叶えて差し上げます！」ん……の……ま、まぁ許してやろう」

それでいいのかって？　いや、そんな事言ったらこの作品終わるぞ？

まぁ身も蓋もない言い方だけどさ。それに願いを好きなだけ、なんて言われたら絶対に許すに決まってるだろ？

「えっと、じゃあ例えば何が出来るんだ？」

個人的には転生とかしたいんだが……もちろん漫画の世界に。ゲームや小説でも可、むしろ歓迎！

他にはいらんな、もともとそんなに欲があるわけでもないし、強いて言うなら転生ってだけだ。

「そうですね……たぶん、神伽さんが考えてる事は全部出来ると思います。チートとか異世界、ですか？（よくわかんないですけど）」

驚愕の爆弾発言、その2だな
っていうか何でも出来るってことじゃねぇかそれ。そっちのがチートだろ。さすが神（爆笑）

「よし、じゃあ原作ブレイクしよう。もちろんチート能力付きで頼む。これはアニメ漫画ゲームラノベ好きなら一度はやってみたいことの一つだよな……。オリ主になりたい、っていう。俺の手で世界を変えるぜ！　　みたいな暑苦しいノリも小説なら許される。それが転生クオリティ」

「あ、はいわかりました！（本当はよくわかんないけど）
では、能力はどんなものが良いですか？」

「そうだな……」

数十分ほど考えて、俺はこれらの能力に決めた。

「伝説の勇者の伝説」より

『複写眼』（アルファ・スティグマ）

眼で見たものを高速で解析・理解する事が可能。
簡単に言うと「ＮＡＲＵＴＯ」の写輪眼みたいなやつかな。覚醒したらチートですよ、これ？

『フェリスの剣技』
（だんごあくまのわざ）←今命名

世界でも最強と呼べるレベルの剣技・及び身体能力の事。これだけでもかなりのチートだけどね

「１１ｅｙｅｓ」より

『劫の眼』（あいおんのめ）

自身の望む未来をあらゆる可能性の中からつかみ取る能力。これが一番チートだよなぁ
ま、使うたびに魂が削られるから乱用ムリだけどね。その副作用なくしてもらおっと

「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ」より

『サーヴァントのスキル全般』

ランサーの「矢避けの加護」とかギルガメッシュの「黄金律」のやつね。ちなみにｚｅｒｏも含まれる……ん？　　よく考えたら「狂化」とか「バーサーカー化」も含まれるんじゃね？理性なくすのは流石に

『道具作成』

これはオリジナル、というかテンプレだけどね。あらゆる道具を生み出す能力だな、もちろんオリジナル道具も既存の道具もできるぞ。Ｆａｔｅの宝具とか余裕で作れる。ちなみに言うと、キャスターの道具作成なんか目じゃないよ？
領域的にはアーチャーが宝具の原典創るみたいな感じ？
そんぐらいスゴイんだよ……自分でやってなんだが、どんだけチートだよ。

「……はい。付加しておきましたよ？　（まぁ、他にもいろいろつけましたけどね。不老不死とか自由に見た目と性別変えられるとか）」

「さんきゅ。……って、今なんか何げに重要な事言わなかったか？」

「気のせいですよ、樹の精」

確かになにか聞こえた気がしたが・・・それもかなり重要なことが。ってか、樹の精てなんだよ

「それと、Ｆａｔｅのスキルですか？　　これを全部付加するのは流石に無理ですよ・・・。なので、５つ選んでください。それを付加しますから。ちなみにまた選び直す事も出来ますので」

「あ、そうなの？　　じゃあ～・・・・・・『矢避けの加護』『中国武術』『直感』『対魔力』『戦闘続行』をお願い」

ちなみにＲａｎｋはというと・・・・・・

『矢避けの加護』Ｒａｎｋ　Ｂ
『中国武術』Ｒａｎｋ　Ａ＋＋＋
『直感』Ｒａｎｋ　Ａ
『対魔力』Ｒａｎｋ　Ａ
『戦闘続行』Ｒａｎｋ　Ａ

ていうかチートですね、わかります。

「わかりました～。それで、どこの世界に行くんですか？
今の神伽さんなら、念じるだけで世界の壁を超えられますし・・・・・・」

それが一番の問題だな。行きたい世界は山ほどあるんだよなぁ～。
個人的には「これはゾンビですか？」とか「シーキューブ」とか「夜桜四重奏」とか「ロザリオとバンパイア」とか。
でもマイナーなんだよね、これ。読者の皆様に伝わるか不安・・・・・・って、何言ってるんだ、俺？

「そうだなぁ・・・・・。よし、決めた！　俺は「ネギま！」の世界へと行ってくるぜ！！　いやー、生きてた時から一度は行ってみたかったんだよねー♪　ネギあんま好きじゃないんだけど、あいつのフラグへし折ってやろうか？　いや、

あえてネギと「完全なる世界」の共存ルートさせる？　　やっべ楽しい！　　これなら死んだのもそんなに悪い事じゃないかも？」

「そうですか～（正直、ノリについていけないです）。では、あちらの世界にナビゲーターを呼んでおきますので、向こうに着いたらナビゲーターと接触してください」

そして俺は世界の移動を念じてみた。すると頭の中に図が浮かぶ。

『行き先を入力してください』

【　　】

なにこれ、カーナビ？

心の中でツッコミながらも、入力を済ませる。えーっと、ね、ぎ、ま、と・・・・・・

【ネギま！】でよろしいですか？

わー、本当にカーナビみたいじゃんこれ。神様の力って結構科学より？

「では、行ってらっしゃいませ。もし用があれば呼び出して下さい。神伽さんを殺してしまった責任を果たすため、あなたの命令なら従いましゅから」

なにこれほんとお持ち帰りしたい！！！
シリアスで噛むとかどんだけドジッ娘属性強いんだこの柚とかいう神様は・・・・・・

ってか話してる感じだと、感情の起伏が激しいんだよなぁ。
低姿勢になったり、真面目クールな感じになったり・・・・・・と思ったら噛むしさ。

「～～～～～～～ッ！！　と、とにかく！　行ってらっしゃいませ、ごしゅじゅんしゅん・・・・・・」

・・・・・・ねぇ？　これはもう、押し倒しても文句ないよね？
っていうか誘ってるんじゃないのなんてことも考えちゃうよ？
・・・・・・ハッ！　いかんいかん！

「煩悩退散煩悩退散煩悩退散煩悩退散煩悩退散！！」

「ど、どうしたんですかご主人様！？」

「グハァッ！！」

ちょっ、今のトドメになったんですけど！！　　てか、いつの間にそんな呼び名が・・・・・・・

「な、なぁ。ご主人様って・・・・・・・？」

「あれ、お嫌でしたか？　　おかしいですね・・・・・・この『転生マニュアル』によると「この手の人はご主人様と呼べ。さすれば道は開かれん」と・・・・・・」

どんなマニュアルだよ、それ！？
てか道は開かれんっておい。開くのは新たな世界への道じゃね？

「ご主人様はやめてくれ・・・・・・。せめて他の、なんかこう健全なやつを」

「でしたら、えーっと・・・・・・マスター？」

「あぁ、うん。それがいいや、というかそれにしてくれ」

ちょいマニアック風味が残ってるけどそこはスルーですよ。

「んじゃ、行ってきますよ。またな、柚」

「（な、名前で呼ばれました！）は、はい！　　では、行ってらっしゃいませマスター。原作の６００年前の世界へ」

「へ？」

かなり重要な単語を聞いた時にはもう遅い。
既に世界への移動は始まっていて、だんだんと意識が薄れて行くのを感じたから。

「ちょっ、えっ、おま！」

思わず伸ばした右手には人の肌の感触。
そして新たな重みが俺の体にかかってくる。

「え？　　えぇぇぇぇ！？」

あぁ、きっと柚の手を掴んだんだな、と理解する。
そしてゆっくりと落下する感覚、右手には柚を掴んだままで。

そして俺は思う。

（６００年待つとか、どんだけぇぇぇ　ぇぇぇぇぇぇ！！）

巻き添えを食らった神は思う。

（なんで私までぇぇぇぇぇぇぇ　ぇぇぇ！？）

・・・・・余談だが、ちょっと良い匂いがして柔らかかった。

おぉオリ主よ、死んでしまうとはなさけｎ「おまえのせいだろうがーーー！！」

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎ後書き

作者（以下作）「いえーーーーー！！」

神伽（以下神）「うるさい黙れ（バキッ）」

作「いたっ！　何すんだよ～」

神「うるさい。そしてキモイ。死ぬことを推奨する」

柚「なんか神伽さんのキャラが違う！？」

作「嫌いな奴には敵対心むき出しな設定にしたのが仇となったか・・・クッ！」

神「邪気眼が・・・。て、なんで６００年前なんだよ。俺は普通にナギの幼馴染とかがよかったんだが？」

作「エヴァ様なくして何がネギまかぁ！　エヴァ様のいないネギまなんで、ただの薬味物語じゃねえか！」

柚「いろいろな人を敵に回す発言はやめて下さい！」

作「むぅ・・・「むぅ言うな」」

神「てか、なんでネギまなんだ？　お前、ＦａｔｅとかＤ．Ｃのが好きじゃん。ネギまとか３１までしか持ってないし、かなり読んで

ないだろ」

作「いや、その2つは今書いてる・・・現在進行形で、この後書きを書きつつ片手間で」

柚「じゃあなんで・・・？」

作「続きにしたいから・・・って最初は思ったけど、それだとはてしなく時間がかかることに気がついた。どんだけ早くても半年はかかるじゃん」

作&柚「「あぁ・・・なるほど」」

作「だから、タイトルだけいっしょで主を変えてやろうかとおもって・・・それでいまに至る」

神「はぁ・・・計画性ないな」

作「何をいまさら」

柚「あはは・・・。そ、それで、何かアンケートがあるとか？」

作「あぁ・・・いや、攻略してほしいキャラとか作ってほしい道具とかあったらっていうのをやろうかと」

神「またテンプレな・・・」

作「うぐっ！」

柚「神伽さんひどいですよ～。いくら本当のこととといっても」

作「グハァッ！」

神&柚（（何やってんの、コイツ？））

作「う、うわーーーーん！！（逃）」

神&柚「「あ、逃げた」」

神「余談だが、この後書き書いてるときにハプニングが起きてな。全部消えた」

柚「うわぁ～・・・」

神「それで書き直した結果がこれだよ」

第1話　わーい、中世ヨーロッパだー♪　ソロモンよ！　私は

ＰＶ１０００突破！

第1話　わーい、中世ヨーロッパだー♪　ソロモンよ！　私は

目覚めると知らない場所でした。
というか森の中です、はい。そして横には「きゅう～」とか言いながら倒れてる神様（笑）

まぁ、「どーせヨーロッパだろ」っていう予測が立つ分まだマシかね。
だって６００年前ってエヴァが吸血鬼になった年だし。

「さて、と。テンプレ通りならこの辺でエヴァに会えるはずな、ん、だ、け、ど～？　　おっ、あれか」

キョロキョロしてると前方のお花畑（今まで気づかなかった。大丈夫か俺？）で花を摘んでいる幼j……もとい少女を発見した。ちなみに隠語じゃないぞ？w

やっぱ可愛いなぁエヴァ。俺にはロリの気はないけど純粋に可愛いよこの娘ていうかお持ち帰りおkですか？（（（暴走乙

「……？　　あの、どちら様でしょうか？」

そんな俺の雰囲気（変態オーラ）を感知したのかこちらに気付くエ

ヴァ。
やっべ、敬語とかマジヤヴァイw　　ギャップ萌死ぬわ俺

「あ、こんにちは（ニコッ）。えっと俺は旅をしてるんだけど迷っちゃったんだ。よかったら、人の住んでいるところまで案内してくれないかな？」

とりあえず旅人で通すか……まさか正直に言うわけにもいかないし、ね。
エヴァは俺の言葉を素直に受け取ったようで警戒もせずに近づいてくる。
……なんかこう言うと俺が悪いやつみたいだな。何故ッ！？

「そうなんですか～。でしたら、私のうちに来ませんか？
歓迎しますよっ♪」

「それはありがたいけど……いいの？　　親御さんに許可とか取らなくても」

「大丈夫です！　　お父様もお母様もとっても優しい方なので、遠慮しないでください！　　あ、ついてきてください」

えぇ娘や……ものごっつえぇ娘やなぁ……（泣）
思わず関西弁になるほどえぇ娘やで

そしてエヴァちゃんに手をひかれて森の中を歩いていく。

「あっ。柚のこと忘れてた」

見にいくとまだ倒れてました♪
その寝顔を見てついチョップした俺は悪くない……はずだ！

「けほっ！　うぅ～……ヒドイですよ！　なにも殴らなくたって良いじゃないですか！　具体的にはお姫様は王子様のキスで目覚めたとかそんな展開があっても良いと思います！」

「良しじゃあキスするか今すぐ。目を瞑れ何怖がるな一瞬のことだ俺に全てを委ねれば良い」

「ふぇっ！？　あぅ～……／／／」

真っ赤になって大人しくなる柚。
……良し、鎮圧完了だ。なんか煙出てるけど、神様（笑）だし煙くらい出るだろ

その後正気にもどった柚も連れて行く。

それと、柚が一緒に来たからナビゲーターとやらも今はいないらしい、なんでもその内姿を見せるらしいけど。

するとエヴァちゃんがチラチラとこちらを見ながら何かを言おうとしている。

「あの、旅人さん……ええと「あ、ジンガだよ。こっちはユズ」そうですか。ジンガさん達はどこから来たんですか？」

「東の方だよ。知ってるかな？」

「東……尖閣の諸島問題があっｔ「ストップ！　なんで知ってるの！？　ていうか違うから！　そこじゃないから！」……そうですか」

某腹ぺこ王並の直感スキルでも持ち合わせてんのこの娘は？
あれってランク高いと未来視もできるし。そして何故に残念そうなんだ。

（……持ってますね。しかも直感ＥＸです）

念話、というかテレパシー？　みたいなので話しかけてくる柚。……マジですか？　ＥＸてあんさん、宝具クラスやで？

なんでそないなもん……ってまた関西弁になってもうたやないか。ゴホゴホ！　　あ、あ～……直った。

そんなこと言ってる間に城が見えてきましたよ。すごく……大きいです／／／

すると、城の方から人がこちらに駆け寄ってくる。
初老のヒゲの男性で、鬼気迫る表情なので少し怖い。見た目が某錬金術師のホムンクルスのお父様似だ。思わず身構え、柚もちょっと怯えてる。

「うぉーーいぃ！！　　エヴァ無事かぁぁぁぁーーー！！！！」

「あ、お父様～！」

ものすごい勢いでこちらに駆け寄ってくるお父様……顔がすっごい怖いんだけど。
でも、さっきの心配は杞憂だったみたいだね？　　お父様だから心配してるのかな……怖いけど（大事なことなので二回言いました）。

「エヴァ！　　大丈夫か怪我はないか命に別状はないか！？
悪魔に魂を捧げたり変な男に拐われたりしなかったか！？」

「もぅお父様は心配症ですね……大丈夫ですよ」

「そうかそうか！　　……む？　　エヴァ、こちらの方達は？」

こちらに少し訝しげな視線を向けてくるお父さん。
まぁ娘が女連れとはいえ、知らない男といたら当然の反応だよね。

「初めまして、自分はジンガと言います。訳あって旅をしていたところ、道に迷ってしまいお宅のお嬢さんに出会いここまで案内されてきました」

「初めまして～。私はジンガさんの連れでユズ、と言います（ぺこり）」

「ほぅ……それはそれは。若いのに大変ですな。私はこの娘、エヴァンジェリンの父親でクライヴ・マクダウェルと申します」

「あ、どうもご丁寧に」

と言って頭を下げると、クライヴさんがエヴァちゃんを抱きかかえているところだ。

ちなみに俺は２０で柚は知らないけど見た目１５〜６くらいだし、クライヴさんから見たら若いんだろう。

「お父様！　　ジンガさん達を家に泊めるのはダメですか？」

うーん……エヴァちゃんの気持ちは嬉しいし、ここで関わっておけば原作介入も出来そうだけど……見ず知らずの男をいきなり泊めるのｈ「良いぞ」ちょっ、クライヴさん！
手を出すつもりはないけどもうちょっと警戒しようよ！？

「やったぁ！　　ありがとうお父様っ♪」

そう言ってエヴァちゃんはクライヴさんに抱きついてから飛び降り、お城へと駆けていく。元気一杯！　　エヴァちゃんマ〜ン！（愛と勇気だけが友達の人風に）

「あの……良いんですか？　　自分で言うのもなんですが、かなり怪しいですよ俺。そんな奴をいきなり泊めるのはどうかと……」

「ん〜〜、でもエヴァちゃんが良いって言ってますし、ジンガさんにその気がないなら大丈夫じゃないですか？　　それにクライヴさんも反対しないですよ、ね？」

「エヴァの頼みならなんでも聞きますよ私は！」

力強く断言してくるけど……親バカ？　　途端、真面目な顔になりそれに、と続ける。

「エヴァが人を泊めたいなんて言うのは初めてなのですよ。あの娘はあまり大人というのを信用しませんからね。私が領主などという立場にいるせいで、エヴァには色々と大人の汚い部分を見せてしまいましたから……」

さっきまでのおちゃらけた雰囲気から一転、お父さんは真面目な顔で語り出す……これは
原作にはない情報だな。人を信じないのは真祖になってからだと思ってたけど、この頃の経験があるからだったのか。

「ですから、私は嬉しいんですよ。初めて会ったにもかかわらず、あなた達に懐いているというのが。……よかったら、しばらく滞在してください。その方がエヴァも喜びます」

そのまま頭を下げてくるクライヴさんに、俺は即座に頷いた。

「わかりました。それに、俺自身もこれからどうしようかと思っていましたから。良い娘さんを持ちましたね」

俺がクレイヴさんに頭をあげるよう促す。そして顔を綻ばせる。柚もウンウンと頷いている。

「そうでしょうそうでしょう！　あれは私の自慢の娘ですよ！……狙うなら今ですよ？」

「はぃっ！？　いやいやいや！　何言ってるんですか！！　冗談はやめてくださいよ！／／／／」

「いやいや、私は大真面目ですよ？　あの娘もいつか、好きでもない男と結婚させる事になるでしょう……領主の娘という立場とはそういうものです。そんな男の下にやるくらいなら、あなたの方が１００倍マシですよ！」

豪快に笑いながら肩に手を回してくるクレイヴさんは、父親の顔をしていた。その言葉に嘘がないことを、一介の学生（元）である俺にも感じられた。

「……」

何故だか柚の視線が痛い。こちらをすごい剣幕で睨んでくるんですけど……俺、何かした？

「お父様〜、ジンガさ〜ん、ユズさ〜ん！　お家に入りましょう！」

「おぉー！　わかったよー！　ジンガさん、今日は飲みましょう！　特上の酒をご馳走しますよ！　ユズさんはお酒イケますかな？」

酒かぁ……俺は一応大学生だし、こないだようやく２０になったんだから、飲んでも問題ないな。それに、これを断るのは失礼というものだ。

「あはは……わかりました。今日は付き合いますよ。エヴァちゃん今行くからー！」

なんか隣で「ユズ、行っきまーす！」とか言ってるから、こいつもお酒は大丈夫なんだろう（多分）

その後、見たこともない酒（クライヴさん曰く、数百万は下らない）を振舞われ翌日酷い二日酔いになるけど……後悔はしていない！

そしてそのままマクダウェル家でしばらく過ごすことになった。
俺達が来た時、エヴァちゃんは８歳だったらしい。確か１０歳の時に真祖になったから、あと２年か……止めるのはいい。けど、それでは色々と都合の悪い部分が出るだろう。
下手したらこの世界がＢＡＤ　ＥＮＤなんてことになりかねない。
可哀想だけど、真祖にはなってもらうしかない……ゴメンね、エヴァちゃん。

第1話　わーい、中世ヨーロッパだー♪　ソロモンよ！　私は悪

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎ後書き

作「はい、時間ない！　あと少ししたらでかけないといけない！」

神「どうしたんｄ「黙れ！　迅速に終わらせろ！」」

柚「怖いです・・・」

作「やばい、時間がっ！　あと１０分しかない！」

神「じゃあとりあえず要点だけ言えよ」

作「この作品の略し方を募集します。作者は「なでブレイク」とかよんでます」

柚「『はにはに』みたいな略し方ですね」

神「どっちかというと『ととモノ』じゃね？」

作「そうだな・・・って、だからじかんねぇんだよ！　じゃあね！」

柚「・・・・・行っちゃった」

神「リアルにあいつは忙しいからな」

柚&神「「それでは今日はこの辺で・・・」」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

第2話　無知を演じ続けた男（前書き）

神「なんかタイトル真面目じゃね？」

作「ふっふっふ。カッコいいだろう！」

神「邪気眼……」

作「グッ！」

神「オタク特有の『擬音を口で言う』が出たよ・・・・・・」

柚「せめてもうちょっとオブラートに包みましょうよ」

作「さすが柚！　　よく言った！」

神「黙れっちゅーの。お前はとりあえず3－1で無限増殖でもしてろ」

作「何気に過酷な労働！？　　やだよ！　　あれ地味にキツイんだよ？」

柚「作者はあれやらないとラストまで行けませんから」

神「俺なら2機あれば行けるけどな」

作「ありえん・・・！」

第2話　無知を演じ続けた男

俺たちがマクダウェル家に来て1年が過ぎた。

今日はエヴァちゃんの10歳の誕生日。エヴァちゃんの前にはとても大きいバースデーケーキとプレゼントがあった。ちなみにどちらもクレイヴさんが用意した。

「エヴァへの愛に比例して、ケーキやプレゼントは大きくなる」とは本人の談。

そしてその場にはユズ、エヴァちゃん、クレイヴさん、クレイヴさんの妻でエヴァちゃんの母親のジャスミン・マクダウェルさんがいた。

あ、もちろん俺もいるぞ？　　いない訳ないじゃないデスカ！

まぁ、最初は俺もそう思った。

使用人の人からエヴァちゃんの誕生日を聞いていたから、「もしかして俺呼ばれるんじゃね？」という期待もないといえば嘘になる。

だけど、いざその日になってもなんのお呼ばれもない。仕方ないから「うわーんママー友達の誕生日に呼ばれなかったよひどいや！」とか言ってママ（枕）に抱きついて泣き寝入りするところだった。

ユズも見当たらないし本格的にふて腐れてやる！

そんなこんなで部屋へ戻ろうとしているところをエヴァちゃんに捕まり問答無用でずるずる引きずられる様は壮観だろう。

いやーあれは痛かった。背中がヒリヒリするもん、未だに。
幼女に引きずられるなんて・・・・・・くやしい（びくんびくん）

で、なんかどっかのでかい扉の前（2年経つのに城の構造を把握してない俺涙目）で待たされて「入っていいよ～」とエヴァちゃんの可愛い声に呼ばれ入ると、そこはパーティー会場でした、まる。しかも全員が俺の方にクラッカーを向けているのは、何故？

「えーーっと・・・・・・？　　これは一体なんでしょうか？
　状況が理解できないんですが？」

「ジンガさんとユズさんの歓迎会ですよっ♪」

「本命はエヴァの誕生日ですけどね！　　わっはっは！」

「あ、な、た？　　それはジンガさんとユズさんに失礼でしょう？　　何度言ったらわかるのかしら？」

「ジンガさ～ん、こっちです～」

エヴァちゃん、クライヴさん、ジャスミンさん、ユズの順に声をかけてくる。
エヴァちゃん可愛い！　　クライヴさんはジャスミンさんの黒

いオーラにちょっとビビってるっぽい。

とりあえず手招きしてるユズの方へと行ってみたけど・・・・・・。

「なぁ、ユズ？　　歓迎会って・・・・・・なにゆえ？」

「何でも、私たちがここに来てもうすぐ2年じゃないですか。それにエヴァちゃんの誕生日が近かったので「一緒に歓迎会をしましょう！」というエヴァちゃんの発言から始まって、クライヴさんが０．５秒で「オーケィ！」と了承して、今に至るです（ビシッ！）」

敬礼しながら答えるユズ。
去年はされなかったからか・・・・・・？　てか、去年は色々と大変だったしなぁ。

『エヴァちゃんお風呂事件』とか『クライヴさんＶＳジンガ』とか『ジャスミンさん最強伝説』とか『ユズのファンクラブが密かに結成されました事件』とか・・・・・・ｅｔｃ

もう名前で内容が想像できるよね！
みんなの妄想＝事実になるわけです。はーい、ここテストに出るよ～。

・・・・・・とりあえず１つ言えることはね。チートってやっぱり卑怯だね♪
２年の間に使ったりしてみたけど。複写眼とかスキルとか劫の眼とか！
ちなみに劫の眼はＯＮ／ＯＦが出来る。原作みたいに虹彩異色なんてことにはならなかったのは幸い。

あと、道具作成しましたよ。
もちろんＦａｔｅの宝具も創りましたよ。だって使いたいじゃないか！
とりあえず《約束された勝利の剣》とか《破壊すべき全ての符》とか《天地黎離す開闢の星》とかは意外にも創れました、てへっ♪

でも流石に魔力を込めるのはどうにもならなかったよ・・・ｏｒｚ
ルールブレイカーは使えるけど、エクスカリバーとかエヌマ・エリシュとかは流石に魔力的にムリっす！　　っと、話が逸れたな。
俺は隣にいるユズに話しかける。

「ところで話しは変わるけど、ユズ・・・・・・わかってる？」

「はい。今日の夜、ですよね？」

そう。今日はエヴァちゃんの１０歳の誕生日。つまりは真祖となる

日なのだ。

原作では詳しく書かれてないが、おそらく今夜にはあるだろうな・・・・・。

クライヴさん達は何も知らずに幸せな顔をしている。これから起こる事も知らずに、ただ幸せそうに。

「・・・・・・無知は罪、ってか？　　クッ、本当の事を伝えない俺自身も、十分業が深いな。これでは、幸せな一家庭を踏みにじる無粋な輩と何ら変わりはないな」

思わず自虐的な事を言って、皮肉っぽい笑みを浮かべる。

何も変わりはしない。そんなことーーとうの昔に知っていたはずなのにな。

思い出すは過去、自身の事。

何もわからない、だから何もしない。そんなことでは済まされないのに、その事を知っていてやめなかった。唯々無知を演じ続けたのは、遠い過去の事ーーいや。それは今も変わらないか。

自己嫌悪、自傷行為、自己憎悪、今の俺の感情をあらわす言葉はいくらでもある。でも、

「・・・・・そんな事はないですよ。ジンガさんは何もあの人達に危害を加えないですし、それよりもエヴァちゃんを助けようとしています。罪はない、とは言いません。ーーでも、それでも、その事で心を痛めるジンガさんは、十分に優しい。優しすぎますよ・・・・・・」

それを受け止めてくれる人がいる。
俺の隣で優しく包み込むように微笑んで。
なのに、今にも泣いてしまいそうな危うい顔をしていて。

「・・・・・・あーぁ。俺、サイテー。女の子にここまで気を使わせて、しかも泣かせちゃうなんてな。はは……」

笑いながら空を仰ぐ。
そこに空はなく、視界に映るのは無機質な天井。

視界が歪む。

眼から流れでるそれを誤魔化すためにさらに高く頭を上に向ける。

ーーここに空はないけれど、俺の心は彼女の一言によって青空のように透き通っていくのを感じていた。

ーーー夜。

何も無い暗闇の奥。
深淵と呼ぶべきそれは、とても不気味に映る。
静寂という言葉でも足りないほどに、ただ無音。

だからこそ、俺はその異変に気がつくことが出来た。
カサカサと何かが這いずり回るような音がする。
耳障りで、不快で、姿は見えないが嫌悪してしまう気配。

俺は今、エヴァちゃんの部屋にいる。
隣には姿を消し、気配も消したユズ。
何でも神は存在の秘匿が第一で隠蔽に長けているそうだ。
もちろん信仰する分には存在を知られても問題がないらしいが。

「・・・・・・下衆が。何が目的か知らんがここに来る以上、相応の覚悟を持ってもらいたいな。貴様は直ぐに我が剣の露としてやる」

相手にはそんな呟きは聴こえない、聴くことが出来ない。
俺にはユズのように神の業など使えないが、この身はかつて神にも届いたという英雄たちの技術を身に宿す。

今俺は、ハサン・サッバーハのスキル【気配遮断】を付加している。
それこそ英霊クラスの相手であろうが余程でなければ気づかれることはない。
まして只の魔術師風情が気づけるはずもなし。メディアなら別かもしれんが。

（ジンガさん・・・？　　口調がいつもと違いますよ？）

少し時代がかった口調に困惑の色を見せーーといっても見えはせず、そんな気配がするだけだがーーこちらに訪ねてくる。

先ほどからのこの口調には訳がある。
言ってはいなかったが、俺の家は代々剣術を引き継いでいく一家だ。
それ故に、厳格さと礼儀を重んじる。
そのせいか、幼少の時から礼儀は徹底されてきた。ー一最も俺が１５の時に両親は他界し、俺１人になったことで口調を普通のものにもどしたが。

「・・・・・・これが俺の素だ。感情が昂ぶると元に戻ってしまう、普段は自分で意識して変えているがな」

（・・・・・・ごめんなさい）

「なに、謝ることはない。俺が話してもいい、と判断したから話しただけだよ。信頼してる証だと思ってくれ」

すると姿は見えないが嬉しそうにしているユズが見えた気がした。
気のせいだろうか？

そんなことをしている間に部屋のドアが開く。
黒いローブを纏った人影がエヴァちゃんが寝ているベッドへと迫る。
ここで止めたい衝動を、拳を握り締めることで抑える。
その時はあまりの怒りで気づかなかったが、俺の手からは血が大量に滴っていたらしい。

「ククク・・・・・・何も知らずによく寝ている。これは好都合、さっそく術式を始めるとしようか」

声の主はやはり気付かない。
その部屋に自分を射殺さんと睨みつける視線があることに。
何も知らない男は懐から大量の薬品・チョークを取り出す。
赤、白、黒のチョークで床に魔法陣を描き、薬品を各所に配置し、時に垂らす。

そうして完成した魔法陣にエヴァちゃんを寝かせ、何事か叫び始める。

「フハハハハハハハハ！！　誕生せよ、美しき真祖の吸血姫！　エヴァンジェリン・マクダウェルよ！　神の齎した福音、否！　【闇の福音】よ、我が手に収まり我が為に動き我が為に死ね！　そしてこの世界に混沌を！」

高らかに笑う、その目に宿るのは歓喜か狂気か。
その声にはまるで、生まれ落ちた我が子を祝福するかのような感情が篭っていた。

身体が痙攣し、苦しそうに呻く少女。
それを見た俺にはもはや理性で押さえつけるほどの余裕がなく、気が付けばこの右手は朱に染まっていた。

第2話　無知を演じ続けた男（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎ後書き

作「みなさーん、こんばっぱー！」

神＆ａｍｐ；柚「「・・・・・・・・」」

作「あ、あれ？　　なんだよーノリ悪いぞー？」

神「いや・・・まさかそれを現実にやるヤツがいるとは思わなかった。すまん、俺はまだまだお前のことを見くびっていたようだ」

柚「痛い痛い痛い怖い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い怖い痛い」

作「柚まで！？　　ひどいッ！　　ていうか無表情で言われると怖い！！」

神「自分で書いたキャラに弄られる作者ってどうよ？　　人として」

作「人として！？　　作者とかの概念超えて人としても疑われてる！？」

神「まぁ、置いといて・・・なんだこの廚二丸出しな文は」

作「これでも頑張りました。作者にはこれが精一杯です！」

柚「作者さんは書く時に何も考えないタイプですからね～。なんかテキトーに書いてたら
文になってた類の人ですね」

神「いや、それはそれでどうよ？　　プロットとか設定とかどうしてんの？」

作「そんなものはない。考えたことはあるけど、設定を作った作品は何故か1話として書き上げれなかった」

柚「何ですかその特異体質は・・・。世の作家さん達に喧嘩売ってるとしか思えませんよ？」

神「それで上手ならまだしも、死ぬほど文才が無いというオチ」

作「他の作家さん達は「文才がない」なんて言うけれど、謙遜はやめて！　だったら俺たちの作品は「文才がない」以下になるじゃないか！　それが下手な人の心を傷付けるんだ！」

神「だから喧嘩売るなっちゅーの！　リアルでは喧嘩なんかした事がないチキンのくせして」

作「悪いか！　腕っ節なんかシラネ。喧嘩した事ねーから。あと痛いのはめんどくさい」

神「どんなだよ・・・」

作「付け加えると、視点変更そんなにしません。ていうかまだしてないもんね」

柚「変更しましょうよ・・・」

神「そして俺に変な後付け設定が、な。剣術を代々引き継いでいくという廚二丸出しですねわかります」

作「うるさい！　例によって例のごとく思いつきです、変な

ところがあったらすいません」

神「駄作者。だから感想が一個も来ないんだよ。評価とお気に入りはされてるっぽいけどね」

作「見てもらえてるけど、感想がないと不安になる・・・。だ、だれか心優しきお方は感想をください」

神「無理だろう（スッパリ）」

作「・・・燃えたよ。真っ白だ・・・」

柚「と、とりあえず、今回は終わりましょう！　　ね？」

作「ん。次回をお楽しみに！　　タイトルなんかは作者が投稿する時に考えてるからまだない！」

柚「良いんですか、それ・・・」

作「良いの！　　じゃあ前回作った変な決めゼリフをどうぞ！」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

柚「なんなんですか、この恥ずかしいの・・・」

作「なんか頭に浮かんだ」

神「さすが（悪い意味で）廚二神」

第3話　醜悪な二律背反（前書き）

作「今回はもしかしたらグロいかもしれません」

神「いや、別に普通じゃね？」

柚「わ、私はちょっと・・・」

作「グロ苦手な方は注意してください。まぁ、そうでもないと思いますけど」

第3話　醜悪な二律背反

Ｓｉｄｅ？？？

「フハハハハハハハハ！！　誕生せよ、美しき真祖の吸血姫！　エヴァンジェリン・マクダウェルよ！　神の齎した福音、否！　【闇の福音】よ、我が手に収まり我が為に動き我が為に死ね！　そしてこの世界に混沌を！」

やった！　成功した！　念願だったこの時を、ようやく迎えることが出来た！

思えばこの計画を考えて早7年。
私を追い出したＭＭ元老議員に復讐するという願いの為にただ一心不乱に待ち続けた。
なぜ実験動物（ニンゲン）を解剖しただけで、なぜ魔導生物（アクマ）を創っただけで、何故何故何故。しかし、その憂いも今日で終わる！

ククク・・・・・・待っていろよＭＭの元老議員共！
この私をＭＭから追放したことを後悔させてやる！

グリッ

「・・・・・・は？」

なんだ今の音はイヤ待テ目ノ前に人がいル？
あれ頭がボーッとシテキた。胸が痛い。あの人物が手に持ッてルのは心臓？　　誰の

そこで私の身体は傾いた。
大きな音をたて、床に背中から打ち付けられる。
最後まで何が起きたのか知ることは、最早叶わない。
そしてその身体は紅い水溜りに浸されていった。

Ｓｉｄｅジンガ

気付いた時には既にその男は紅く紅く染まって倒れていた。
その身体から流れ出る紅い泉で身体を洗うかのように沈んでいた。

ほとんど無意識だった。
背後から駆け寄り背中に手を突っ込む。そこから心臓のみを正確に抉り出し、相手が痛みに気付く前に引き抜く。そして余りにも見事に抉られた身体は抉られた事にすら気付かず、意識を保つ。

脳の許容量を超えた痛みは脳が痛覚をシャットダウンしてしまう。
自覚するまでその事には気付かずに動き続ける。

そして目の前の男は死んだ事すら気付かずに死んでいった。

「・・・・・・・・・・」

人を殺した。

でも何も感じない／気付いたら壊れてしまう

足下にある肉塊を見る。

とても醜い／なんて綺麗なんだ

手にあった心臓を握りつぶす。

その感触にゾッとした／とても快感だった

何かが身体の中から湧き上がるようだ。この感覚はなんだーー？

これは目覚めてはいけない気がする。
しかし同時にとても心地よく感じる。
なんなんだろう？

「・・・・ん！　　ジンガさん！」

目の前にユズの顔が広がり、そして意識を取り戻す。
心配そうな顔をして覗き込むようにこちらを見つめていた。

「あぁ・・・。ユズ、どうした？」

なんだか頭が痛い。何故だ？
そして鼻につく鉄の臭いがして、それが更に頭痛を増していく・・・
。ふと臭いの発生源を見るとそこには、

「し・・・・・たい・・・・？」

侵入者の無残な姿が、そこにはあった。

「えぇ、そうです。ジンガさん今のは・・・・」

「な、何で死んでんだよ！？」

「何でって・・・・憶えて、ないんですか？」

「何がだよ？」

「ジンガさんがやったんじゃないですか。かなり見事な手際で・・・・神の私でもぼんやりとしか認識できなかったです」

俺が？　　俺がやった？　　いつ？　　どうやって？

何で？　　どんなふうに？

考える。考えて考えて考える。

何か頭の奥がチリチリとする感覚がある。先ほどのことを思い出そ

うとする度にそれは起きる。
ー先ほどの事？　　思い返そうとするが、

「ぐ、ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

激しい頭痛に襲われる。
頭蓋を粉砕されるかのような感覚に襲われる。
耳や鼻や口から腕を突っ込まれてぐにぐにと掻き回されるような感覚に襲われる。
ありとあらゆる神経を、雑巾でも絞るように力一杯捻られる感覚。
それに耐え切るなんてことが俺に出来るはずもなく叫ぶ。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？　　ぐっ、がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ　ぁぁ！」

Ｓｉｄｅユズ

「ジンガさん！？　　どうしたんですか、ジンガさん！
なっ、これは・・・神罰？　　何故こんなものが・・・いや、今はそんなことよりも！」

神罰については気になるがいまはジンガさんを何とかしないと！
私は胸の前で拍手を打つ。

「我、契約分を持ち、語りかける。求めるは治癒の精、拒みしは神の力。この呼びかけに応じるものあれば、力を捧げ、我が糧となれ！　　これを持って天地の理の壁は意味を成さず、我が手によって理は世界を変える！」

すると私の身体に力が集まるのを感じる。
これは神が使う神術の一種で精霊のチカラを直接取り込むもの。
この世界の魔法よりもよほど強力だ。

その力を両の手に収束させ、ジンガさんの頭に置く。
抵抗するので思いきり抱きしめて押さえつけると大人しくなったので、治癒に専念する。

「ぐっ！　　さ、流石にキツイですね・・・。この神罰、かな

り上位の神が掛けたもののようですし。でも同じ神である以上、解除することは可能です！」

力を思い切り、私自身のチカラも全て注ぎ込む。
そして一瞬パッと光ったかと思うと、穏やかに眠るジンガさんが私の腕に抱かれて、いた。

その事に安堵して、身体のチカラが抜ける感覚に逆らえなかった。
そのままジンガさんを抱きしめたままに床に倒れ込む。
わたしを下にしてジンガさんに負担をかけないようにしながら、わたしの意識も遠ざかっていった・・・・・・。

その場にいるは最早流す血すらも無くなった男。
狂気に支配され、悪徳を尽くし、人間と認識されなくなった人間

異世界からやってきた、人を殺めることすらなかった一般人。
感情に飲み込まれ、殺戮を行使し、人間を逸脱した人間。

それを抱くは可憐な少女。
神としての職務に準じ、転生を行い、人間を人間ではなくした神。

床に描かれた魔法陣で眠りしは純粋な子供。
ただ欲望に巻き込まれ、人間を超え、吸血姫と化した真祖。

この場には、もはや人間など1人も残っていなかった。

第3話　醜悪な二律背反（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎ後書き

作「はい。今回はちょっと短かった、かな？」

神「もっと長く書けよ。駄文なら駄文なりにもっと楽しませる工夫をしろよ。ただでさえ意味のわからない文章なんだから今回は」

作「いやー、やっぱ1時間で書いたからさ？　穴があるのは仕方ない。むしろ見逃して下さい！　指摘なら受け付けますが」

柚「・・・・・・（ガクガクブルブル）」

作「ん？　ユズよ、どした？　そんな隅っこで膝を抱えたりして」

柚「いや、あの～・・・すっごい怖いんですけど。身体の震えが止まりません・・・」

神＆ａｍｐ；作「「そうか？　別に普通じゃね？」」

柚「二人ともどういう感性してるんですかッ！！」

作「いや、俺はどっちかというと怖がりなんだが・・・青鬼とかシザーマンとかが怖くて寝るときラジオを聴いてやっと眠れた」

神「ふっ・・・俺の生きてた頃のほうが怖かったぜ」

柚「どんな人生送ってるんですか！？」

神「普通の殺伐とした人生？」

柚「普通じゃない！！」

神「それは後々・・・。で、また厨二臭いな、おい。『ぼくのかんがえたかっこいいきゃらくたー』と同等の黒歴史にならんか？」

作「自分はそうなってもいいかな、と。人に見られなければ」

柚「まぁ、リアル友達が何人か見てますけどねー」

作「それもまぁいい。理解ある友人たちだし」

神「あ、そう・・・」

作「喋ることもなくなってきたなぁ。そろそろ終わりますか。あ、感想お待ちしてまーす。荒らし以外なら何でも来いだぜ！」

神「それではみなさんさようなら。読者（おまえ）のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「かなら危険なことを言った気がする！」

第４話「覚醒／目覚め」

ーーー夢を見ていた。

それは何時、何処、何故、全てが理解出来ない夢だった。

ただ分かるのは一つだけ。

他人の苦しみを恍惚と感じる自分がいることだった。

自分にとってそれは、唯一の存在意義。それだけが自分の生きる意味だと言っているようだった。

だから実行した。他人に苦しみを与えるために。自分の快楽の為に。この魂に刻まれた使命感の為に。

目が見えなくて悲しいと言う人がいた。

他人の眼玉を抉り出してその眼を入れてやった。必死に遠慮するので無理やりにやったら血涙を流して喜んでいた。

子供が欲しいと言った女性がいた。

道で捕まえた子供を腹を割いていれてやった。また遠慮するので無理やりにやったら叫んで喜んでいた。

自分の国が戦争するのを嘆いた王がいた。

その国と周辺の国の国の人を皆殺しにした。今度は遠慮されるまえにやった。喜んでもらえたかな。

人に喜んで貰えると嬉しいな。みんな叫んで喜んだり血涙を流したり足に縋り付いたりしてくる。そんな人たちがとっても愛しい。

人に喜んで貰うのは、自分という存在が存在する為の存在理由。存在するだけの存在じゃなくて、存在するために存在意義を全うした方が楽しいし、皆も喜んでくれる・・・そう自分というモノを生み出した人は言ったっけ、意味はよく分からないけど。

とりあえずその人を喜ばせてみたら、とても楽しかった。あぁ、そう言うことかと、その人に感謝した。

それからもいっぱいい人をシアワセにした。

たのシいナーーー

「ーーーーー！？」

目が覚めると、そこは知らない天井だった。おそらくベッドに寝かされているのだろう。少しの間ボーッとしていたが、ゆっくりと意識が覚醒してゆく。

ここはどこだ？　　少なくとも俺の家では無いな・・・誘拐？　いやそれこそありえない。俺にそんな価値はないし。

そこまで考えて、ようやく思い出す。

自分が死んだこと。

柚という可愛くてドジな神様に出会い、転生したこと。

転生先は「ネギま」という漫画の世界で、二次創作のテンプレのごとく原作６００年前に来たこと。

エヴァという原作キャラに出会い、気に入られ、しばらく滞在することになった事。

そしてーーーあの夜の事。

「そ、そうだ！　エヴァは！？　あの男は！　ユズ！」

必死に辺りに叫ぶ。が、その声を聞き入れる者はいないと言うかの様に返事はない。そしてふと、隣を見ると安らかに眠る少女がいた。背中には薄い水色の翼を持っているその少女はユズだった。

「ユズ・・・？　翼、あ、神だからか？」

何時もと変わらないその寝顔に、先ほどまでの焦りは何処へやら。

ユズの翼は初めて見たが、これまでの2年間でも何度か俺の布団に潜り込んだ事はあったので、驚くことでもない。

「ん、うぅ・・・」

あ、起こしてしまっただろうか？　　悪いことをしたかな、などと考え、ユズの頭に手を置く。しばらく焦点が定まらなかった瞳が、徐々にハッキリとしてくる。そして、こちらの姿を見ると驚いた表情をして、

「じ、ジンガさん！？　　大丈夫ですか！　　何処か痛いところは！？　　身体が怠いとか辛いとかありませんか！？　　あぁ薬薬いや注射でもなくて手術違う火葬気が早い！」

・・・なーんかいい具合にテンパってるなぁ。わたわたした感じで実にキュート、キューター、キューテストだ。

「いや落ち着け、むしろもちつけ。心配してくれるのは嬉しいがな、てか燃やそうとするな」

ていっ、とユズの頭に軽くチョップを入れる。「あうっ」と言いながら上目遣いで見てくる・・・やべ、ちょいキュンと来たw

「す、すいません。でも本当に大丈夫ですか？」

「あ～・・・・・大丈夫。特に身体に影響はないし、何処か痛いとかも無いかし動ける。メイビー」

「たぶんて何ですかたぶんて！　やっぱり調子悪いんじゃないですか！」

いやここはネタに走るべきだと思ってね？　っと、騒いだせいでエヴァちゃんが起きちゃった。

「うぅん・・・ジンガさんおはようございましゅ・・・」

なにこれかわぇぇぇぇ！！！　すいませんクライヴさんジャスミンさん。お宅の娘さんは今ここで純潔を失いそうです、主に俺のせいで。

（ギロッ）

！？　な、なんだ？　今とてつもない殺気を感じたんだが・・　・恐る恐るその方向を振り向くと、とても良い笑顔でにこやかなユズさんがいました・・・あれおかしいな、笑顔なのに安心出来ないよ

その後に何が起きたか、それは神でさえ知らない。というより思い出したくない。

一つ言うのならばーーーエヴァちゃんの中で「ユズを怒らせたら殺される」というのが深く刻まれたらしいことだけだ。

Ｓｉｄｅエヴァ

私が目を覚ましたのは、一組の男女の声を聞いたからだった。

その二人は私にとってーー父様や母様には敵わないけどーーとても大切な人たちだ。

男の人の名前はジンガさん。ある日、私が花を摘みに行って（ジンガさんにその言い方はダメと言われた。なんでだろう？）いるとき、キョロキョロしながら森の奥から歩いてきた。旅の人かな～と思っていたら本当にそうだったらしくて、私の家に来ませんか？

などと言ってしまっていた。

今思えば、それが危険なことがわかる。もし、相手が変質者だったら？　もし、相手が盗賊の類だったら？　もし、相手が逃げてきた犯罪者だったら？　考えれば考えるほどに、何故あんなことをしたのかわからない。

もう一人の女の人はユズさん。ジンガさんと一緒にいた、とても綺麗な女の人。

同性の私から見ても思わず見惚れてしまうような容姿をしていて、性格もとても優しくフランクな感じの人。スタイルもとても良い・・・私もいつかあんな風になるかな？

ユズさんは、よくジンガさんと一緒にいるところを見かける。何をするでもないけど、ジンガさんがからかってるのをよく見かける。

・・・二人は恋人なのかな。もしそうならしかたない、でも違うなら・・・

？　違うなら、なんなんだろう。私は何を考えてたんだろう

それはわからないけど、とにかく今は目の前の二人に声をかけないと。

「うぅん・・・ジンガさんおはようございましゅ・・・」

Ｓｉｄｅエヴァ　ｏｕｔ

第４話「覚醒／目覚め」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「約１ヶ月ぶりに登場！　作者だぜぃｂ」

神「ウザ・・・あ～、主人公やってるジンガだ」

柚「メインヒロインことアイドル！　神様やってるユズです／／／」

神「照れんならやんな～」

作「ま、やらせてんのは作者パゥワァーなんだけどさ」

柚「／／／／／」

神「ワロスワロスｖｖ」

作「６４６４・・・で、やっと感想もらえたー！　清浦刹那さん感謝です！」

神「よかったな。それとそっちの荒神大和だったか？　要望通りいつか語り合おうじゃないか」

柚「私は抱きしめたいって言われました／／／」

作「あ、ユズ。これ読んであげて」

柚「？　えっと『刹那お姉ちゃんだ～い好き♪』」

作「よし、これで相手が萌えてくれれば良いんだけどね」

神（ユズ可愛いユズ可愛いユズ可愛いユズ可愛い）

柚「！？　な、何か悪寒が・・　・」

作「風邪かな？　ま、二次元は風邪ひかないでしょ」

神「夢壊すようなこと言うなよ」

作「良いじゃないか。あ、これからも頑張りますが、たぶん更新が異常なまでの不定期になると思います」

神「それに駄文だからな。お気に入り登録が一つ解除されてたし、総合評価２００ジャストから下がったもんな」

作「うるせー！　　あ、ＰＶが気付いたら2万突破、ユニークが気付いたら４０００突破してました！　　これもひとえに読んでくださっている読者様のおかげです！」

作&神&柚「本当にありがとうございます！」

神「ま、お前の本心は『お気に入り登録や評価するんなら感想くれよ』だろうけどな」

作「何故ばれたし！」

柚「作者さんも登録だけとかしてるじゃないですかー。人のこと言えないですよ」

作「い、いや自分はＰＳＰしか使えないから仕方ないというか」

神「ならＰＣ使えるときにやれよ」

作「あんまり長く使ってると、祖父と祖母がお怒りになられますｏｒｚ」

柚「・・・（ Ｔ＿Ｔ）／（＾ー＾ ）」

神「作者の代わりに・・・感想、質問、批判、等々受け付けておりますので、荒らしはご遠慮ください」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「マンネリ化してきたかな。新しいセリフでも考えよ・・」

第5話「二人の想い」

「ーーーで、エヴァちゃん。今の状況、わかってる？」

あの後、なんとかユズをたしなめて（というか修羅の怒りを発散させて）、エヴァちゃんを含めた三人で話し合おうとしている。内容はもちろんこれからの事や、エヴァちゃんの身体の事などだ。

「・・・あのこと、ですか。ユズさんから聞きました。ジンガさんが私を助けてくれたんだって」

「ーーーッ！！　・・・いや、俺は結局何も出来てないよ。吸血鬼になるのも、なにより、クライヴさん達を助けることが、出来なかったから・・・」

今回の件、犯人なんかよりも俺のほうがよほど罪深いだろう。相手の目的はわからなかったが、おそらく利用するためなのは間違いないと思う。それに比べて俺は、「原作」からズレることを恐れて傍観していた。

ズレたら困る？　　ハッ、俺がここに来た目的は「原作ブレイク」のハズなのに、な。結局俺は、自分の欲のために動くそこらの犯罪者よりも外道なのだろう。そう思うとエヴァちゃんに顔を会わせられない。

「いえ、良いんですよ。ジンガさんは、こうして私を悪い人から助けてくれました。確かに、事件を防ぐことは出来なかったのかもしれません。ーーけど、私はこうして生きています。たぶん、ジンガさんが助けてくれなかったら私は、飼い殺しのような目にあってしまうと思うんです。そんなの、生きているとは言えない・・・だから、ジンガさんに感謝こそすれ恨む筋合いなんてないです」

・・・この娘は。本当に十歳なんだろうか？　　気遣いが出来るし優しい。ふふっ、流石はクライヴさんとジャスミンさんの子供だな。

「ジンガさん・・・」

ユズが心配そうに俺を見てくる。駄目だなぁ、俺は。女の子に心配かけさせるなんて、『あの時』と何にも変わってない。ーーこんなんじゃ、アイツに怒られるな。アイツは俺が死んでどんなふうになっただろう？

「うん、ごめん。ごめんな、ユズ。ごめん、エヴァちゃん・・・今だけは謝らせてよ」

視界は歪む。

その後小一時間の間、ユズとエヴァの胸を借りて俺は泣いた。大の男が情けないなどとは思わなかった。その涙は、今後一生分の涙として流したつもりだから。これからはもう二度と、悲しい涙を流させないためにーー

Ｓｉｄｅエヴァ

「寝ちゃいました・・・」

「寝ちゃいましたね～」

今、私の手にはすやすやと子どものように寝息を立てる男の人、ジンガさん。私の命の恩人で、とても優しい人・・・。

「ユズさん、これどうしたら良いんでしょう？」

流石に私でも、その、なんというか・・・男の人を抱きかかえるのは恥ずかしいです／／／

「・・・放置？　　いえ、言い方がアレですね。そのままにしておいてあげて下さい」

「このまま・・・／／／」

うぅ～、恥ずかしいです／／／　　ジンガさんってよく見ると、いや、よく見なくてもカッコ良いし、私のことを真剣に考えてくれる優しさもあるし、お父様とお母様にも気に入られてたし・・・両親公認、というやつです／／／

ジンガさんのことを考えると、なんだかとてもドキドキしてきます。

ジンガさんの顔を見ると、なんだかとてもフワフワした気分になります。

ジンガさんに名前を呼ばれると、なんだかとてもポカポカした気持ちになります。

たぶん、この感情を私は知ってます。いえ、知らないけれども今知りました。

見ていてください。お父様、お母様ーー！　　私は絶対に幸せになってみせます！

ジンガさんと、その、ふ、2人で一緒に・・・／／／（プシュー）

・・・あ、ユズさんってジンガさんの事、どう思ってるんでしょう？

Side　Out

Ｓｉｄｅユズ

目の前で寝ているのは、私のご主人様。名前を鷲羽神伽さんです。

ある時、私の手違いでついうっかり殺してしまった人ーーうぅ、今思い出しても申し訳ないです・・・。

そのお詫びにと転生させてあげました。能力をつけてあげました。そう、普通ならそこで終わるハズだった。

転生先に送る時に、ふと腕をつかまれた。何だろう、と思っていたらそのまま落ちて行ってしまった。どうやらジンガさんがついうっかりつかんでしまったようだ。

最初は「なんでぇ～！？」とか思ってましたけど・・・今では来て良かったと思っています。ジンガさんはとても良い人です。

人間というのは身勝手で傲慢で自分の欲の為にしか動かない人だと思っていたけど・・・ジンガさんは私の知っている人間とは少し違った。

確かに身勝手だし傲慢だし欲もある。私にパシリをさせるし、私をよく叩いてくるし、「げんさくぶれいく」っていうのがしたいって言ってたし・・　・。

でも、ご主人様はとても優しいです。

頼まれた物を持っていけば頭を撫でて「ありがとう」って言ってくれます。

私を叩くのだって、私がなにか変な事をした時だけだし「ごめん」って後で謝ってくれる。

「げんさくぶれいく」っていうのも、悲劇を回避したい、救われない人を救いたいっていう理由からしい。

だから私のご主人様はとても、とっても優しい人です。

ーーこれからもこの人と一緒にいたいと思うのは、神様失格でしょうか？

Side　Out

第5話「二人の想い」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「ちょりっす！　我は作者なり～」

神「本当に口を縫い付けてやろうか・・・主人公の神伽だ」

柚「下級でも神は神！　末端だけと頑張ります！　柚です」

神「よし、今回も駄文だな死ね」

作「もう死ねが口癖みたいになってないか？」

柚「死ねなんて駄目ですよ！　苦しませないとこういうタイプは反省しません！」

作「柚が黒く染まった！？　くっ、聖杯の泥を浴びたかーー」

神「どこの騎士王だ？　　ユズオルタとか言うなよ？」

作「ギクッ！？　　そ、そんなこと微塵も思ってマセンヨ！？」

柚「わかりやすいです・・・」

神「もうお前はある種の天然記念物なんじゃないのか？」

作「えぇーい、黙らっしゃい！　　感想、質問、批判、等々受け付けております！」

神「お気に入り登録するなら感想をくれｂｙ作者」

柚「評価するなら感想くださいｂｙ作者さん」

作「言ってねぇ！？　　そんな失礼なこと思いはすれど言ってない！！」

神「思ってはいるのな」

柚「手より口が出るタイプ？」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「文才って、どうやったら身につくんだろうか・・・」

第６話「作者の技量が足りなくなるとキンクリに走るというテンプレ」（前書き

作「ＰＶ４万、ユニーク７千突破だぜ！」

神「まだまだだね」

柚「てにぷりっ♪」

第6話「作者の技量が足りなくなるとキンクリに走るというテンプレ」

やっほー！　　みんなのヒーロー、ジンガさんだよ！

・・・ごめん調子乗りました。

あ、そうそう。あれから色々あって三人で旅に出る事が決まりました。・・・端折るなって？　　作者には酷な相談なんだよ、察してあげて？（ぶっちゃけ大戦に早く行きたい）←本音

あ、エヴァちゃんが俺のことを『ジンガ兄様』、ユズのことを『ユズ姉様』と呼ぶようになった・・・ガハッ！（吐血）

で、では、ここからはダイジェスト（？）でどーぞ・・・

○月□日

～とある夕方～

「あの、兄様！　　私に戦い方を教えてください！」

「ん～・・・まぁ良いか、な？」

「大丈夫じゃないんですか？　　・・・原作的な意味で（ボソッ）」

「（おいおい・・・w）じゃあ、どんなスタイルにする？
主なのは後衛の魔法使いと、前衛の魔法剣士かな。エヴァちゃんは魔法使いタイプだと思うけど」

「そうですか・・・（兄様と一緒に戦いたかったなぁ）。じゃあ私は魔法使いタイプにします！」

「わかった。じゃあ前衛となる従者が必要だね、どうしようか？（チャチャゼロ作らせるしかないよね）」

「（えっと、原作では・・・なるほど）じゃあエヴァンジェリンさんは人形遣い（ドールマスター）になったらどうですか？」

「？　　どーる、ますたー？」

「おぉ、そうだな。あ、人形遣いってのは名前の通り人形を使って戦う者のことだね。自分で人形を作って、人形に魂を入れて、人形と共に在る。それが人形遣いだね」

「お人形さん・・・うん、それにする！」

（計画通り・・・ニヤリ）

「上手に出来ました～♪」

「エヴァちゃん、そこは焼けましたじゃないと」

「ネタのご利用は計画的に♪」

「名前はチャチャゼロです！」

「ナンダ、コノカオスナ空間・　・・」

△月◇日

～街の宿屋にて～

「兄様～！　　これ、見てください！」

「どれどれ・・・おっ！　　エヴァンジェリン『不死の吸血鬼』賞金２０万$か～。初めてでこれなら結構高い方じゃないか？」

「そうですか？　　えへへ／／／」

「うりうり（なでなで）」

「むぅ・・・。あ、ジンガさんも賞金かけられてますよ？」

「なに！？」

「え～っと、ジンガ『吊られた傀儡』『根絶』賞金８０万$・・・わっ！　　私より高いです！」

「・・・やっぱり、エヴァちゃんと一緒にいるとこうなるのね。とほほのほ」

「そりゃあエヴァンジェリンさんの盾になって無傷でピンピンしてたり、生き残ってまだ闘志がある人とかを殲滅してればそうなりますよ」

「だってエヴァちゃんに当たったら可哀想じゃん？　それに下手に助けるとまた狙われるから面倒なんだよ」

「「・・・天然ですね（だね）。そして自分勝手です（だよ）」」

「オレ、忘レラレテル・・・？」

■月◎日

～ある朝食の風景～

「おい兄様。そこのパンをくれ」

「あいよ・・・って、えええええ　ええええええええええええええ
え　ええええええええええええええええええええええええ
えええええええええええええええええええええ！？！？」

「ガッ！？　うるさいわバカっ！　何をそんなに驚いている！？」

「え、エヴァちゃんがグレた！　あぁ、クライヴさんジャスミンさん。不甲斐ないこの俺をお許しください。かくなる上はこの命を持って償いをーー」

「ケケケ。旦那、手伝ウゼ」

「「何してるんですかぁ（してるんだ）！？」

「エヴァちゃんがグレたのは俺の責任！　だから俺がーー！」

「う・・・し、仕方ないだろう！？　　こうでもしなければ他のやつらからナメられたままではないか！　　だから威厳を保つためでだな、そしてチャチャゼロ冗談でもするな！」

「む、そうなのか。なら仕方ないな」

「心臓に悪いですよ～」

「ケッコウ本気ダッタンダケドナ」

「全く！　　・・・兄様に死なれたら困るじゃないか（ボソッ）」

▲月▼日

「さーて、結構実力もついたかな？　俺の賞金も５００万まであがったし」

「戦闘描写ないですね～、期待してる人もいそうなものですけど」

「ユズ姉様、それは言ってはいけない気がするぞ？」

「ケケケ、ネタバレスッカ？」

「やめときなって。戦闘描写って言っても一瞬で終わるし、エヴァちゃんも２００万まであがったしな～。俺らも立派な『悪の魔法使い』だな」

「そうだな、私たちは『誇りある悪』としているのだが、な。・・・それにしてもさっきの話で思い出したんだが、兄様は何故無詠唱で劣化しない大魔術が使えるんだ？」

「え、無詠唱なんてしてないよ？　いつもちゃんと詠唱してるよ俺」

「は？　嘘つけ、いつも最後の名前のところしか言ってないじゃないか」

「あぁ、あれは『高速神言』っていう俺のスキルだよ。わかりやすく言うと、究極の早口言葉ってとこかな？　一瞬で詠唱終わらせてるんだよ、最も言葉自体がもう人間の耳には聞き取れないし、普通の奴には発音不可能だけどね」

「このチートめ」

「ケケ、チートダナ」

・・・と、まぁ色々なことがあったりした。時間的には４００年ほどかな。戦闘だろ、チャチャゼロだろ、懸賞金だろ、あとは定番の偉人巡りかな？　ジャンヌとかヴラドとかに会ってきたよ。結構良い奴らだったな～　、ヴラドは飲み友達になりました。【王の財宝】に入ってた酒を飲ませたら仲良くなった。・・・蛇足だが、見た目はＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡと同じだった。そう考えると奈須さんってスゲーな。

あ、【王の財宝】は宝具ではなくスキル認定らしいです。最初の１０年目あたりで気付いたんだけど、吹いたわｗ　ユズの勘違いらしいんだけどね。今は感謝する。

で、ジャンヌはアーサー王の上位互換みたいな感じかな？
なんか知らんが告白されたりもした・・・エヴァちゃんとユズの視線がとても痛かった。他に特筆する所はないな、うん、ない。

さて、現在１８００年。大戦まではあと１８０年、気ままにしますかね。

なーんて、思ってた時期が俺にもあったよ、えぇ。でもねぇ、主人公はトラブルを引き寄せる体質らしいよ？　俺に平穏が訪れるのはいつになるやら・・・はぁ

第６話「作者の技量が足りなくなるとキンクリに走るというテンプレ」（後書きあり）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「感想増えて嬉しいぜ！　作者、さんじょー！」

神「こいつ滅びないかな・・・主人公の神伽だ」

柚「最近出番が減った気がする！　一応神様の柚です！」

作「えぇ、今回はキンクリですがなにか？　ほぼ台詞オンリーですがなにか？　あ、この間の事とかはいつか番外とかでやろうと思ってます」

神「今やれ、すぐやれ、骨まで砕けろッッッッ！！！」

柚「骨が砕けたら出来ないんじゃ・・・？」

作「あー、これはネタだからスルーして。あ、Ｔｅｓｔａｍｅｎｔ

さん、清浦刹那さん、ｚｅｒｏさん。感想ありがとうございました！」

柚「刹那お姉ちゃん、ありがと～♪」

作「刹那さんが感想書いてくれる限り、お姉ちゃんと呼ばせますよ。だから毎回感想を・・・ね。（ニヤリ）」

神「黒いな、俺には及ばんが。そして大和、いつか話し合うのを楽しみにしているぞ」

柚「私も刹那お姉ちゃんと話してみたいですねー」

作「それは刹那さん次第かな」

神「お、そろそろ時間だぞ蓑虫」

作「・・・まさか、ｍｅの事かい？」

神「Ｙｅｓ。他にいないだろ」

作「Ｍｙ　ｇｏｄ！！　まぁいいや、いつも通り、感想、批判、質問、等々受け付けております」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「受験？　何ですかそれは、美味な食材ですか？」

第7話「大戦突入～♪　ただし紅き翼はまだいない」

Ｓｉｄｅ　ジンガ

「う～む・・・紛争終わんないな」

今俺は紛争している地域の上空にいる。
ネギまの世界じゃ割とポピュラーな飛行魔法＆ａｍｐ；認識阻害で戦闘の行く末を見守っているところだな。
ま、誰も気付けないだろうけどね。
気配　遮断気付くのって『完全なる世界』か『紅き翼』ぐらいだ

と思う。

先程から拮抗した戦いを繰り広げる2つの軍。
帝国と連合、その両者の戦はやはり終わらない。
連合に「紅き翼」がいないから火力不足は否めないだろうが、それでも帝国は連合に勝てないってどーよ？

お？　鬼神兵が投入されたな。
ん～・・・あれ作るのにかなりの時間と金が掛かるらしいんだよね。
俺から言わせれば、その金で兵士を育成したほうが絶対強いと思うんだけど。
だって鬼神兵って攻撃手段が「口からビーム」と「武器で攻撃」くらいしかないんだよ？
そりゃ威力とかはあるだろうけどさ、「紅き翼」とかだと普通に負けるし。
しかも味方を攻撃しない様にしなきゃだし、絶対兵士のが良いって。

「暇だな～、久々に歌うか？　曲は・・・あれかな。ンッン！」

《〜♪》

これぞ、俺の数少ない特技＆ａｍｐ；趣味の一つの歌だ！
歌なら誰にも負けない自信があるし、声真似モノマネお手の物ってね！
生前よくカラオケで１００点取ってた。

《〜♪》

ちなみに今は「混沌頭」の中で1番好きな歌だな。
「フェイク私」や「青を見つけて」とかは微妙だし・・・あ、こずぴぃ（キャラのあだ名＊キャラ本人が命名）とかのキャラソンも好きかな？
個人的（作者的）にはこずぴぃとセナが好きだし。

「～♪　・・・ふぅ、久々に歌った～。最後に歌ったのはエヴァちゃんのお城にいたころかな？　４００年かぁ、俺も年とったな」

あ、「エヴァどこ行った？」って思った人、良い質問だ。
実はあれから色々とあったんだ。
原作ではエヴァちゃんは長年孤独に戦闘を行ってきたからこそのあの性格と強さを得たわけだと思うんだ。
なのに、この世界では俺やユズといったイレギュラーの存在で少しぬるま湯に浸かってしまったんじゃないか、ってぐらいに性格が丸くなってる。

だから、少し独立の意味も込めて修行の旅に出させた。
もちろん原作通りにアフリカへ、今は別れて６０年くらいになる・・・結構寂しいもんだよ。
お婆ちゃんが死んだら部屋が広く感じる法則かね。

それでも心配なのでユズを影ながら同行（尾行？）させてある。
手助けはしないよ？
それじゃエヴァちゃんの為にならないからね。流石に生命の危険の時は介入させるけれども。

お、夢中になっていたら戦争が終わりそうになっていた。
勝ち負けではなく単純に、両軍にこれ以上戦闘を続ける余裕がなくなったというだけだけどな。
ま、それでも終わりには変わりないわけで・・・っと、何だこの気配？

「北の方角に１４ｋｍってとこか？　ま、行きますかねッ！！」

宇宙（そら）を駆ける　自由に優雅に～♪　ｂｙ蟻企画

飛行魔法サイコー！　Ｙａｈｏｏーー　ーーーー！！！　速さが足りないッ！！

Side　???

クッ、油断したね。まさか初戦闘とは言え龍種に遅れを取るなんて、やはり経験の差だろうか？
ここは魔法を囮にして逃げるべきだね。
詠唱をしたら隙ができるから無詠唱で、威力は落ちるけど怯ませるくらいは出来るだろう。

「『冥府の石柱』」

空中に巨大な石柱が何本も現れる。

・・・こんな呪文を無詠唱出来るのはボクくらいだろうね。

自惚れる訳じゃないけど、ボクを超える人なんてそれこそ化物レベルじゃない限りはない筈だ。

・・・おっと、つい自慢になってしまったね。

おそらく直撃したと思うから、先程の衝撃で起きた土煙に紛れてここを去るとしよう。

そうと決まればーー！？

「グッ！！　・・・油断、したね。まさか魔法障壁持ちだとは。しかもボクの魔法を受けて無傷だなんて、龍樹より強いんじゃないかい？」

あの帝国の最終兵器よりも強いなんて・・・やはり、人間たちのレベルの低さを痛感するね。

龍樹が最強だと思っているのがその証拠だね。

「ギャアアアアアアッ！！」

煩いな、身体が動くなら今すぐにでも耳を塞ぎたいところだよ。
どうやら、先ほどの衝撃で身体が動かなくなってしまったようだしね。ボクもここで終わりかな？
まぁ、次の世代に任せれば良いんだけどね・・・。

無様に倒れるボクを、高く見下す龍。
その口に高密度の魔力が集まっていく、どうやら殺す気みたいだ。
あぁ、別に構わないさ。
ボクは人形、生き永らえる事に意味はない。死を恐れていては欠陥品。感情を持つなんて論外だ。

「ガアアァァァァァ！！！」

視界が龍のブレスで埋め尽くされる。この身に達するまで1秒にも満たないだろう。

ーーまだ見ぬ弟妹達、頼んだよ

「おいおい？　いくら竜種でも、子供を虐めるのは感心しないな〜」

そう言ってボクの前に現れたその人は、とても気だるそうにしながら竜種のブレスを片手で防いでいたーー

Side　out

Ｓｉｄｅ　ジンガ

「おいおい？　いくら竜種でも、子供を虐めるのは感心しないな～」

うーん、このブレス結構レベル高いな。魔力の密度も良いし、構築式も緻密だな～。

あ、今『複写眼』で魔法を解析・解除してるんです、はい。この世界の魔法って大抵が解析出来るんで、「解除出来んじゃね？」って思ったら本当に出来たんだよね。伝勇伝スゲーな。

っと、とりあえずこの龍倒して後ろの子を安全なとこへ連れていくか。

見たところそこそこ強そうだし・・・少年兵とかか？　まだ若いのに大変だね～。

「ガアアァァァァ！！！」

「あーもー、うるさいな～。じゃーんけーん、死ねぇっ！！」

某ダメットさんの名（迷？）台詞と共に繰り出すはただの拳。
しかし、その拳にはルーンが刻まれているのだよハッハッハ！
竜種の鱗と魔法障壁如きで防げると思うなよ！！
神（柚）の加護は伊達じゃねぇ、色々とパワーアップしてるのさぁ！

「ギャアアァァァァァ！！」

「ハハハハハハ！！　見ろ、龍がゴミのようだ！！」

右手を上に突き上げてアッパー！
そして上がっていく頭よりも速く回り込み、両手を祈るように組んで思いっきり叩きつける！
トドメに脳天に踵落としィ！！　ルーン如きで倒されるやつは俺の敵じゃねぇぜ！！

「俺に挑むのなら、1万年と2千年前に出直して来なァ！！」

地面にめり込んだ龍に対して言い放つ俺。
……ふっ、キマったな。あ？　キモい？　何をおっしゃるウサギさん。

ん？　何でそんなに簡単に倒せたのかって？
あぁ、俺は最初に『伝説の勇者の伝説』のフェリスってキャラの剣技を頼んだんだ。
なのに身体能力や経験まで付いてきたんだよね・・・なにこれチート？

何を今更　ｂｙ作者

「・・・・聞いてるかな？」

「ん？　おぉ、悪いな。少し考え事と電波を受信してた」

「・・・？　まぁ良いか。それよりもありがとう。命を助けても

らって感謝する」

ペコリと頭を下げて礼をしてくる。礼儀正しいえぇ子やな～、将来出世するかもね。

ま、少年兵じゃ限度はあるか？　っと、早く何処か安全な所へ連れて行ってあげないと。

「気にすんな。それより、ここは危険だよ。家・・・というか本拠地？　は何処かな、その傷じゃ動けないだろうし送ってあげるよ」

すると途端に表情が険しくなる・・・やべ、怪しいか？　と思ったら少し考えだした。

うんうん唸っていますね、やっぱ情報は簡単に明かせないか。

「・・・ここから西に7ｋｍ行った所にあるよ」

お、教えてくれた。本拠地の場所くらいはおｋって判断かな。

まぁそれが命取りっちゃ命取りなんだけどね～、流石に少年兵にはそこまでの判断は出来ないかねぇ。

さって取り敢えず～、どうやって行こうか？

・・・いいや。あとがきのヤツって納得しといてくれぃ。

第7話「大戦突入～♪　ただし紅き翼はまだいない」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「ＦＦディシディアやってます！　作者です」

神「捻るぞ？　何をカミングアウトしてるんだ・・・神伽だ」

柚「遂にジンガさんの側から消えました！　柚です」

作「さって……とりあえず、ＰＶ５万ユニーク１万突破ァァァァ！」

柚「わーわー！　どんどんぱふぱふ」

神「スゴイネ、ヨカッタネ」

作「心が籠ってない！　っと、清浦刹那さん、リョウタさん、感想あざーす！」

神「ちゃんと言えよ。ありがとうございました（ペコリ）」

柚「ありがとうございますー。刹那お姉ちゃんいつもありがとう♪」

作「そいやさ、刹那さんのとこの大和くんから質問があったんだよね。いちおー感想のほうで答えたけどこっちでも答えとこうかな、書くことないし。『神伽の好きなタイプは？』って質問」

神「ふむ、タイプは特にないんだけど。強いて言うなら『好きな奴が好き』というやつだな。ある程度付き合うまでは相手の中身がわからんしな。外見だけが大事ではない、かといって外見を軽んじる訳ではないけどな」

柚「作者さんと同じですね～」

作「俺をベースに作ってあるからな！　バクマンとかでも言っていた作者の自己投影とやらかな？」

神「痛いな、俺の名前も作者のを少し変えただけだからな。どれだけ自分を使ってるんだ」

作「気にしたら負けなんだぜ」

神「痛っ・・・」

柚「（可哀想な人を見る目）」

作「い、いたたまれねぇぜ」

神「ったく・・・あと何か言うことが、っとアンケートだな」

作「何か道具とか無いですかね？　道具作成のスキル全然使ってないし・・・案がなければＦａｔｅとか趣味のを使うけどね？」

柚「空飛ぶ船とかありましたね～。ヴィマーナでしたっけ？」

神「ライダーの天馬もありだな。個人的にはローアイアスとかもだ」

作「で、とりあえず募集します！　無ければ上記の奴とか使いますけど・・・道具作成使いたい！　竜華零さんの『魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～』とか読んでてつい・・・竜華零さん大ファンです！　あと、たぶんないと思いますけどこの小説を見てたらどうしよう！」

神「ねぇよ。あの偉大なお方がこんな駄文を見てるわけねぇ」

柚「ありえないですよ、こんな駄文」

作「ちょっと待て！　柚のはただの自虐ネタだ！」

神「どっちにしても自意識過剰。見られてる訳がない、及び自虐ではなく真実」

柚「作者さんには速さが足りません！　更新速度的な意味ですけど。もちろんクオリティーも大事ですよ？」

作「自分の作品のキャラに説教される自分って・・・ｏｒｚ」

神「なんかこいつの反応がパターン化してきた」

柚「作者さんのリア友と同じですね」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「今回の???は、ネギまが分かる人ならわかりますよね?」

第８話「初戦闘、といっても描写が無かっただけだけど」（前書き）

作「質問なんですけど、１話でＰＶ９０００って普通ですか？」

神「普通に低いだろ。更新しなくてもそれくらいの人はザラにいるし」

柚「作者さんは更新しないと１００とかしか来ませんからね」

第8話「初戦闘、といっても描写が無かっただけだけど」

「だから、そのような事認められないと言っているではないか！」

「もう決めたんだ、いいじゃないか？　ボクにだって人生があるんだ」

「ふむ・・・お主も大変じゃの？」

「なら止めてくださいよ・・・」

ユイ☆にゃん♪

どーもー、天使の音色な挨拶でおはこんばんちは、ジンガです。天使ちゃんマジ天使。はるるんマジ噛様（誤字に非ず

あぁ、今の状況？　カオスここに極まれり！　みたいな感じですねぇ。聞くも涙、語るも涙な話なんてある訳もないですが・・・・笑いは、起きないか。作者の技量ではムリダナ（・　×　・）

あぁ、とりあえず前回の続きから話そうか？　そうだね、あ

れはヴィマーナで目的地に着いた時だったーーー

ーー数十分前ーー

「ん？　どうしたんだい？　ここがボク達のアジトだよ」

そう言ってさっき助けた子ーーいや、若白髪のアーウェルンクスが、こちらに振り向きながら小首を傾げる。

駄菓子菓子、だがしかし！！　俺はそれどころではないんだッ！

（え、ちょ、おまｗｗ　いつの間に俺『完全なる世界』フラグ建てた？　おかしいなぁ～、当初の予定では『紅き翼』に入って『完全なる世界』との共闘で元老院潰す手筈だったんだけどな？　それなのに、なぜ、フェイトフラグ？　意味わからん、俺の計画ハジマタ＼（＾ｏ＾）／　と思いきやすぐにオワタ＼（＾ｏ＾）／）

「・・・もしかして、何か用事でもあるのかい？」

「えっ？　い、いや何もないない。ごめん、ちょっと考え事してた」

俺がそう言うと、少しだけ顔が嬉しそうになった。あれ、この頃ってまだ心がないんじゃ？　それこそ人形の状態じゃね？　あれか、バタフライエフェクトとかゆーやつか。それに俺がここにいる時点でこの世界はネギまではなく並行世界の筈だし。

わー、ここが墓守り人の宮殿なのか～。原作で紅き翼が攻め込んでたところだよ？　ネギじゃないぜ？

・・・ってか俺、まだ原作覚えてるんだな。まぁ生前から興味あることだけは異常に覚えてたからな～、でもフェイトに気付かなかったなｏｒｚ

「おぉ、帰ったか・・・そちらは？」

おぉ？　何か黒フード！　な人がいる。

「やぁデュナミス。この人はボクの客だよ」

デュ……？　あぁー！　あの筋肉マン（笑）か！　最初魔法使いかと思ったら意外と肉体派だったデュナミスっつぁんだ！　思わず手を握ってしまった。ちょっとたじろいでるが気にしないぜ！

「ファンです！　サインください！」

・・・・・・あれ？　返事がない？

おかしいな、二人ともポカンとした表情になってるぞ？　あれ、俺なんか変なこと言ったか？

「・・・ハッ！　待て、何故私にサインを求める？」

む？　何でって言われても・・原作で好きだから、なんて言えんし？　ファンだからじゃダメかな。

「先ほども言いましたが、ファンだからです！　デュナミス様！」

「う、うむ。そうか。これからも応援頼むぞ」

「勿論であります！」

やった～♪　デュナミス様と話が出来た！　俺デュナミス様大好きなんだよね～、キャラも実力も性格も申し分ないしね！

「あぁ、デュナミス」

「む？　何だ、アーウェルンクス」

「ボク、ここを出ていくよ」

「・・・・・・・・・・ハァ！？」

ーーーで、今に至るという。

えぇ、何でもアーウェルンクスさんは俺と一緒に旅がしたいとかなんとか。

「えぇーっと、ゼクトさん？　なんでダメなんですか？」

あ、ゼクトさんは二人の騒ぎを聞きつけてやってきたらしいっす。原作でもそうだけど相変わらずのショタっぷりだな～。

「む、おぉ。彼奴がいなくなっては戦力が減ってしまうのじゃ。儂やデュナミスでも充分じゃがやはり心許ないのでな」

ふむふむ、それはそうだろうな～。貴重な戦力が誰ともわからん奴について行く～なんて、嫌に決まってるだろうしね？　その気持ちはわかる、かな。

「むぅ、このままでは埒が明かん。おい、そこの！」

「え、呼びました？」

　な、何だ？　　ゼクトさんと話してたから聞いてなかったぞ・・・。

「私と勝負だ！」

「うえぇ！？　　何故にそんな流れに！？」

「お前が勝てばアーウェルンクスとの事は認めてやる！　　だが私が勝った場合は諦めてもらうぞ！！」

・・・ヤベー、なんか死亡フラグ（もどき）建ったよ。デュナミス？　　え、なにそれリアルチート？　　だって漫画最後の方の最強ネギくんでも突破できない障壁張る人だよ？　　たぶん、花畑にいるＵＳＣの攻撃くらいしないと破れないと思う。・・・俺の攻撃？　　阿礼乙女ぐらいだろ、俺の戦闘力。

ザシュッ！

　うぉわ！　　考えてる間に戦闘開始してるぅぅぅぅ！！　　しゃあねぇ、ここはやるっきゃねぇ！　　てかやらなきゃ殺される！！

「来い！　ラインバ……雪片弐型！！」

俺の手に現れるのは、一振りの日本刀。形状は通常の日本刀と同じだが、その力は凄まじいものがある。

まず手始めにフェリスがやっていた様に懐に潜り込む。しかし相手は障壁を展開してから動く様子はない。それを好機だと思い、勢いよく逆袈裟に斬りつける！！

ガキィンッ！！

「チッ！」

しかし俺の攻撃は障壁に傷を入れる事すら叶わない。そして反撃を受ける前にバックステップで後ずさる。

「喰らえ！」

そこへ影の槍を無数に打ち込んでくる。その一発一発が恐らくネギの雷の暴風並みの威力があるだろう。大抵の奴は避ける事を選択するだろうが……

「温い温い温い！　この程度で我を倒せると思うなよ！　我を倒したければその3倍は持ってこい！」

その全てを雪片を使って払い、叩き、斬り、流す。影の槍、影槍には術者の意思で操れる擬似追尾性能が存在する。それは避ける事の無意味を意味する。よって迎撃するしかない。

しかしこの身体が行える剣技は最強の剣、ゆえに剣技で右に出るものはない。それを持ってすれば馬鹿正直に進んでくるモノを迎え撃つなど訳もない。

「ならば、これでどうだ！」

そう言って、先程よりも多い影槍を放ってくる。その量ーーおよそ先の5倍。・・・調子に乗ってスイマセンでしたぁー！　3倍とか言ってマジ反省してまうぉわっ！

「チッ、仕方ない。行くぞ雪片」

そう言って俺は目線の高さと同じになる様に雪片を横に構え、目を閉じ指でなぞる。

「余所見とは、余裕だなぁ！」

先程と同じ数の影槍を放つデュナミスは勝ったと確信する。しかし、その思いは盛大に裏切られる事になる。

「ーーー第二開放、『零落白夜』」

瞬間、指を当てていた刀身が換わる。

美しく光っていた刀身は、粒子で形成された光の刃となった。

「ハァッ！」

その振るわれた刀の斬撃により、全ての影槍を打ち消した。

「なに！？」

驚愕するデュナミス。しかしそれは戦場において絶対な隙、その隙を見逃すはずもなく、俺再び懐に潜り込む。

（クッ！　しかしこの障壁を破ることは・・・）

ズシャッ！

ーーーパキンッ！

「なん……だと……！？」

曼荼羅の如く複雑な障壁は破られた。否、貫かれた。そして間もなくデュナミスの胸に斬撃が当たる直前、

「ストップじゃ。双方、辞め」

ーーーゼクトさんの声で、この試合は終わった。俺の勝利という形で・・・。

第８話「初戦闘、といっても描写が無かっただけだけど」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「受験に合格しました、作者です！！」

神「今回ばかりはマトモに答える。ーーおめでとう。神伽だ」

柚「おめでとうございます！　柚です」

作「さて、そんなどうでもいい話は置いといて」

柚「どうでもいいんですか！？」

神「コイツ、親から受からなかったらリアルに家追い出される予定だったからな。橋の下生活1歩手前だったんだよ」

作「んなこたぁ、どうでもいい！カレーパンさん、　空言天狐さん、Ｗｈｉｔｅ　Ｓｅａｌさん、清浦刹那さん、感想ありがとうございます！」

柚「刹那お姉ちゃんありがとう！　私はお姉ちゃんの事、大好きだよ！」

神「大和は俺と同じ好みか。嬉しいな」

作「今回の雪片弐型はＷｈｉｔｅ　Ｓｅａｌさんのアイディア。元ネタはＩＳらしいです」

神「ＩＳ見てないし読んでないもんな、お前」

作「見たいんだけどね、最近金ないぜ」

柚「カラオケで金欠ですね」

作「おう、最高９１点しか取れなかった・・・友達の女子は９０台連発しまくるが、自分は主に８０台」

神「当たり前だろ、てかカラオケネタやめろ」

柚「今回は初の戦闘描写ですね」

作「あぁ、うん。まぁ自身はない。褒められる、ってか感想で何か言われたら嬉しいな」

神「ドＭが」

作「いや、自分はＳＭだから。半々ですから」

柚「それはそれで・・・」

作「気にしたら終わりっすよ。あぁ、関係ないけど自分、東方にハマりました！　といっても二次創作とかだけどね。幽々子が大好

きだー！」

神「地霊殿組も大好きだー！」

柚「天子とにとりと文も大好きですー！」

作「幽々子が1位だけどな！　何時の間にか好きになってた」

神「どうでもいい・・・」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「これからは更新頻度があがるかも？」

第9話「まさかのイレギュラー。そしてラストは意外な展開！？　の巻」（前

作「そういえばＰＶ８万突破。ユニーク１万５千突破。総合評価が５００突破したんだよね」

柚「人気なのかどうか微妙ですよね～」

神「柚は感想で反響あるから人気だと思うがな」

作「ネギまのネームバリューかなぁ……。自分の力量不足が原因で感想が来ないのかな？　未だに１２個っすよ感想。そして文字数が３万ジャストな奇跡」

第9話「まさかのイレギュラー。そしてラストは意外な展開！？　の巻」

ゼクトさんの制止の声で勝負は終わった。

「・・・俺の勝ち、ですね」

そう言って俺は刀を納め、少し悔しそうにしているデュナミスさんに頭を下げ、アーウェルンクスの下へ行く。

「・・・凄いね、デュナミスに勝つなんて。ボクとしては一撃当たれば良い方だと思ってたけど」

「お褒めの言葉、恐悦至極に御座います♪　　ま、俺も勝てるとは思わんかったし？　デュナミスさんが油断しててくれたからね～、あと雪片との相性もあったかな」

うん、ぶっちゃけデュナミスさんが油断してくれたからだよ・・・悪いかっ！？　いいもーん、雪片使ったから勝てたんだからね！

「雪片？　あぁ、あの刀かい？　そういえばデュナミスの影槍や障壁を破っていたけど、どんな仕組みのアーティファクトなんだい？」

あ～……言っていいのかな、これ？　まぁ、コイツらなら悪用はしないだろうし、良いか。

「アーウェルンクスはさ、『黄昏の姫巫女』って知ってるか？」

「あぁ、オスティアの最終兵器だろう？　それがどうしたんだい？」

「まぁ、この雪片はそれと同じで『魔法無効化能力（マジックキャンセル）』機能がついてるんだよ」

俺がそう言うと、すこし驚いた様な表情（といってもヒジョーに分かりにくいが）になり、ため息をつく。

「……君に対して驚くのは、かなりの無駄だとわかったよ」

む、失礼な。俺だって傷つくんだぞ？　ダイヤのボディに

プラチナハートなんだぞ？　……あれ、結構硬いよ？

まぁなんやかんやで、自己紹介こ～な～が始まった。

「デュナミスだ……不本意だが、よろしく頼む」

「はい！　よろしくお願いされました！　アーウェルンクスの事はお任せください！」

「……クッ！　貴様、アーウェルンクスを泣かせたらタダでは済まさんぞ！」

「？？？」

「ゼクトじゃ。デュナミスはあんな風じゃが……まぁよろしく頼むぞ」

「はい！　ゼクトさん、よろしくお願いします」

「あぁ儂のことはゼクトで良いぞ？　それに敬語では堅苦しいじゃろうし、タメ口でも構わぬ」

「あ、じゃあ……ゼクト？　これからよろしく！」

「あ、俺の名前はジンガ。いちおー賞金首やらせてもらってるけど、知ってます？」

「何！？　貴様があの『神代（キャスター）の魔術師』のジンガだと！？」

「ほぅ……お主が『吊られた傀儡（スケープゴート）』のジンガか。過去最高、賞金４５００万と言われておるのは伊達じゃなさそうだの」

「へぇ……君があの『王国剣士（ローランドナイト）』なんだ。なら強いのも納得だよ」

……なんだかとても二つ名と賞金が増えてるよ。しかも厨二臭い。

聞いたところによると、『魔眼の模倣者（コピーペースト）』『金眼の魔王』『ちょ、あの人無詠唱でおわるせかいぶっ放してくるんですけどマジで！』『性職者（ペドフィリア）』とかあるらしい。……おいコラ、誰だ最後のつけたやつ。ちょっと表出ろ斬殺するから。

で、終わり。……うん、よく考えたら今って3人しかいないんだわ。月詠もフェイトガールズもいないし、ナギのころにいた炎と水の人（？）たちもいないっぽいわ。ちょー人すくねー。

「改めてボクも。ボクはアーウェルンクス、名前はまだ無い」

「何故そのネタを……！」

「この間、旧世界で読んだよ？」

待てーゐ！　あれは１９０５年の筈だぞ！？　なんで1世紀近く早く生まれてんの！？　え、俺のせい？

これが……羽ばたき理論（バタフライエフェクト）か！

ふむぅ、この分だと原作知識なんか捨てても良いか？　いや、捨てるのはあれか。「参考にする」程度に留めて過信しなけりゃいっか。

「これで全員か？」

「下の方の組織は今は居ないから、会わなくても良いね。……あぁ、あと1人いるよ」

え？　何々、また俺の影響？

「まぁでも、彼女には会わない方が良いか「誰に会わない方が良いのかしら？」……別に」

そう言ってアーウェルンクスの後ろに現れたのは、一言で表すなら……黒い六枚の翼で空を飛ぶゴスロリ人形？　似たキャラ言うならローゼンの水銀燈かな。っていうか、

「リズじゃん、久しぶり～」

「えぇ、久しぶりね♪　前にあったのは４５０年くらい前だったかしら？」

「おぅ、そんぐらいだな。……にしても、お前は相変わらずちっこいまんまだな、うりうり～」

「なっ、ちょ、やめなさいよー！　これでも貴方より年上なのよ！」

「つってもねぇ～、２００年しか変わんねぇじゃん？　んなもん俺らみたいな不老不死からしたら微々たるもんじゃん」

「ま、まぁそうね。……ふん、私が同意してあげるんだから喜びなさいよね」

「へいへ～い。ま、とりあえｚ「……少しいいかい？」アーウェルンクス？　どしたん？」

俺らの会話に割って入ってきたけど……なんかあった？　あ、無視してたから怒っちゃったかな？　感情があるかは定かじゃないけど。そう思っていたら他の二人も声をかけてくる。

「そうじゃな。儂もお主がそこの娘っ子と仲が良い理由が気になるのぅ」

「……貴様。まさか、そこな魔女に手をつけているのではあるまいな！？」

んー、若干反応がおかしいのが一名いるけどさ。聞かれたからには誠心誠意真心を持って答えよう！　それが俺流（キラッ）

「まぁ、ゼクトさんに対する答えは『旧知の間柄』ってとこ。デュナミスさんへの返答は『つけてねーよ、この野郎』ですねぇ」

ま、実際言った事は本当だね。コイツーーーリーゼロッテ・ヴェルクマイスターとは、先も言ったが５００年近い仲だ。彼女も俺やエヴァと同じで不老不死、兼魔女。ま、実力はこの世界でもかなりのモノ。世界を滅ぼしたり出来るから、下手したら造物主なんかより強い。ナギネギなんか目じゃねーぞ、的な感じ。

そして『手をつけたのか』って質問だが、まぁ、コイツには好きな人いるし。

名前はヴェラード。今は無きドラスベニア王国の王だった男だ。ーーだった、というのは彼が既に死んでいるから。３００年ほど前

にこの世を去った、あいつはただの人間だからな。死して尚、熱く燃え続けるほどの愛の物語がこの2人の間にはあるんだよ。

「あら、私としては手をつけてもらっても全然構わないわよ？」

「あー、はいはい。考えとくよ」

「……そんな邪険にしなくてもいいじゃない」

たまにこんなんしてくるけど、これはアレだ。ヴェラード死んで寂しいから絡んでくるんだよ、きっと。実際他のことにはあんまり執着しないからね、俺をこうやってからかったりする時は元気になる。……辛い事を忘れたいんだろうな。ヴェラードの事を話題にあげると不機嫌になるし。

「のぅ、リズ「その名で呼んでいいのはジンガだけよ」……ヴェルクマイスターよ。彼奴は鈍感なのか？」

「いえ、鈍感ではないのよ。むしろ色恋沙汰には鋭い方ね。……でも『自分がモテる訳がない』って心の底から信じてるみたいだから、自身に向けられる人の好意に気づきにくいのよ。しかも『愛』関連だけに」

「……それはまた難儀な性格だね」

「クッ……！　アーウェルンクス！　今からでも遅くない、こんな奴に付いて行くのはやめろ！　きっとお前は不幸になるぞ！？」

「……？　不幸って何がだい？」

「「なん……だと……（じゃと）！？　まさか気付いていないのか（おらんのか）」」

ま、なんやかんなでアーウェルンクスは俺と共に旅に出た。デ

ユナミスさんの視線がすげー痛かったけど。ゼクトは暖かい目で見送ってくれたし。……何故かリズもついてきてるけど。

「あら、もう暗くなってきたわね」

リズがそう言うので空を見上げると、確かに空はオレンジ色になっており、もう陽が傾いていた。

「そうだね。今日はどうするんだい？　街で宿でも取るのかい？」

「まぁ、野宿のつもりだったけど……リズが嫌だっつーなら宿とるぞ？」

「あら、何故私に？」

え、いや何故って言われても。

「だって女の子には野宿キツいだろ？」

そう言うとリズは心底驚いた様な顔をして「はぁ～」とため息をつく。……なんだよ、そんな目で見るなよ。興奮するじゃないか。……嘘です

「だったら、この子にも聞きなさいよ」

「え、なんで？」

「だってアーウェルンクスも女の子よ？　……まさか知らなかった？」

「……ゑ」

第9話「まさかのイレギュラー。そしてラストは意外な展開！？　の巻」（後

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「最近アイディア沸きまくり！　作者です！」

神「誰かコイツ何とかする道具のアイディア下さい。神伽です」

柚「このあとがき以外で出番なし！　柚です！」

作「はーい、意外かどうかは人によるけど意外な展開だね」

神「リーゼロッテとか出るし、アーウェルンクスなんかまさかの女の子だもんな」

作「いやー、自分はずっと思ってたんだよ。なんで『アーウェルンクス女体化ないんだろ？』って。なんか４番目だかが女の子らしいけど、自分は３３巻までしか読んでないから見た事ないし」

神「そんな理由かよ……ま、でも可愛いんだけどさ」

柚「……いいですよね～、出番のある人は」

神「むっ？」

柚「私なんてエヴァンジェリンさんについていってるから出番ないんですよ！？　しかもこっそり尾行だから会話する相手もいないですし、存在の秘匿しても何時バレるか不安でしょうがないんですよ！！」

神「ゆ、柚落ち着け！　お前にだって出番はあるって、だよな作者？」

作「……さーて、次話書くか」

柚「どうせ私なんてぇぇぇぇぇぇ　ぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

神「柚、ちょ、ま、鳩尾はやめ、いや急所はもっとやばいって！」

作「ざまみろ。何時も自分をボロクソ言うからだ！」

神「ギャアアアアアア！！」

柚「うっ、ぐすっ、ひっく」

作「まー落ち着くさ柚。君にはあと数話したら合流させる予定だから、ね？」

柚「……本当ですか？」

作「本当だって。真面目も真面目、大真面目！　生まれた時から超真面目！」

柚「……クスッ。そのネタ、わかる人いるんですか？」

作「いないかな～？　いないんだろうな～」

神「ゲホッ……うぅ、下腹部が痛い」

柚「じ、ジンガさん！　大丈夫ですか！？　あ、あの先ほどはすいませんでした！」

神「いや、いいんｄ「清浦刹那さん、空言天狐さん、感想ありがとうございました」……言わせろよ」

柚「次回は私とエヴァンジェリンさんが合流かもしれません！」

神「考えてから書けや駄作者」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「クロスオーバーに反対の方はご意見を。これからたくさん混ざるかもしれないんで」

外伝「エヴァの旅～the　Beautiful　World～」（前書き

作「今回は微シリアス？」

神「厨二テンプレです、ご注意を。そしてキノ旅パクんな」

柚「私の出番は・・・？」

外伝「エヴァの旅～the　Beautiful　World～」

私の名はエヴァンジェリン・マクダウェル。元・領主の娘で、現・兄様のその……よ、嫁になる女、だ……。えぇいっ！　言わせるな恥ずかしいっ！

コホン。まぁ私は昔ある男ーー何時の間にか死んでいたので私は知らんがーーに真祖の吸血鬼となる術式をかけられてしまった。さらに愛する父様と母様、使用人の皆も殺されてしまった。

……しかし、そんな状況から救ってくれたのが兄様だ。事件の2年ほど前から城に滞在していて、私がたまたま見かけたのを案内した旅人だった人。吸血鬼としっても私を避けなかった人。そして私の想い人……。

まぁ姉様という障害もいるが、勝敗は比較的私に傾いてーーいや、リーゼロッテがいたか。

クッ！　悔しいがアイツには未だに勝てん。私と似たような存在の癖して私よりも実力もキャリアも上、あらゆる面で私よりも

勝っていると言える最大のライバルだ。しかし一緒にいた年数では負けんぞ！

「……嬢ちゃん？　さっきから1人百面相してどうしたんだい？」

む？　どうやら不信がられてしまったようだ。いかんいかん、私はこんなナリでも（自分で言うのは甚だ不本意だが）高額の賞金首、怪しまれる様な行動は避けねばならんな。

「いや、すまない。少し……嫌な奴のことを思い出してな。気にするな」

そう言うと目の前の男は「そうか？」と言ってそれ以上の追求を止める。しまったな……今は交渉の最中だと言うのに。

今私の前でソファに座っている男は、オスティアという国にあるギルドのギルドマスター。名をラウラ、ラウラ・E・メルツァー。しばらく活動していないがかなりの実力者で、先代のギルドマスターの死去により跡を継いだ者だ。

そして今、私はその男に「ギルドに登録してくれないか？」と持ちかけているところだ。……もちろん最初から了承してもらえるのならば交渉する必要などないが、生憎と渋られている。

「う～ん……。俺としちゃあ、やっぱウチの娘と同い年くらいの娘っ子を血生臭い世界にゃ踏み入れさせたくねぇのよ？」

先ほどからこの一点張り。いくら私が千万の言葉を尽くそうが、彼の一つの想いを崩すことは出来ない。……ならば、私も想いで応えるのが礼儀というものか。

「ラウラ殿。一つ……昔話を聞いてもらえないだろうか？」

そうして語り出すのはある少女の過去。領主の娘として裕福に幸せに育った女の子の、まだ『世界が美しかった』頃の話。

「とある国、とある場所。そこを領地としていた一族がいたんだー」

Side　ラウラ

俺は今、目の前にいる少女の話を聞いている。

こうなった経緯を掻い摘んで話すのならば、「美しい少女がG（ギルド）マスター

Mである俺に仕事をさせてくれ、と言ってきている。な、何を言っているのかわから（（ｒｙ」といったところか。ん？　なんだ今のは。

……まぁいい。それで俺はもちろん反対した。当然だ、娘とさして歳も変わらないであろう少女をどうしてこちら側の血生臭い世界に巻き込めようか。そう言って断り続けていたのだが、何を思ったか。少女は話をしはじめた。

「厳格だが優しい父と温和で慈愛に満ちた母、そして1人の無垢な少女。そんな3人に付き従う使用人たちも彼女たちの事を愛していたし、領主たちも使用人たちを愛していた」

ふむ。話の語り方から察するに、その少女とは目の前の娘のことだろう。そう感じさせる程の気品や優雅さといったものをこの少女からは感じる。職業柄、貴族などの階級の高い相手とはよく会うため、その手の感覚はわかる。

すると、今まで嬉しそうに語っていた語り口から一変。物悲しく哀愁漂う雰囲気を感じさせたが、すぐにそれは消え、続ける。

「その幸せは永遠に続くかと思われていた。ーー最初の変化は、ある時に少女が花畑にいる時に通りかかった男性の登場だった。旅人

だと名乗った彼と同行していた女性を自分の城へと少女は案内した。少女は今でも、何故あの時案内したのかわからないそうだ。フフッ」

その男というのが、この少女にとっての大切な人。この語りの中でのキーパーソンだろう。その相手のことを話す様はとても嬉しそうに見えるからだ。

「……おっと、話が逸れたな。なんの因果か、旅人は少女の両親からも気に入られて滞在する事となった。そして少女や両親、使用人たちも彼らの事を好いた。それを成せるのは彼らの人柄故かはわからないが、何にしろ害のある人物ではなかった。そして子供とは本質を見抜く者、だから少女は知っていた」

ーーーあぁ、この人はなんて優しくて哀しい人なのだろう、と。

「何故かは知らない、ただそう感じただけだからな。その疑問に答えを出さないまま、彼らが来て2年の歳月が流れた。少女の10歳の誕生日会兼旅人の歓迎会。そんな幸せの享受、少女にとって当たり前の日常。……しかし、だからこそ崩れるのは容易だった」

今までのを聞く限りでは何ら問題のないように感じる。だが、少女の雰囲気が物語る。幸せはここまでだ、と。

「ここから先は旅人による話だが、その日、少女が１０歳となった夜。彼女の部屋にある男が現れた。……彼の名はアンベッサ・Ａ・カステル。元帝国付の魔法使いで、違法な合成魔獣（キメラ）を造りだしたり、悪魔を使役したり……所謂、外道などと呼ばれる行為をただ繰り返す狂った科学者（マッドサイエンティスト）だ。彼はその日の数日前にその行為によるお咎めとして職を失っていた。……だからであろう、彼が己を解雇した相手ーーある地方の領主を憎むのは」

アンベッサ・Ａ・カステル。

無学な俺でも聞いた事のある名だ。歴史にも名を連ねる程の悪名高き闇に堕ちた魔法使い、今では学校の教科書にも載る程の有名人だ。

「そうして復讐のために、領主の娘を実験体に選ぶのは彼にとって至極当然のことだったのだろう。そして皆が寝静まった頃に城へと侵入、衛兵たちも酒に酔って仕事を放棄していた。ーーそして、その男は少女にある術式を施した。真祖と化す禁断の術式を。その後、その男は旅人によって殺されたそうだ。そうして不死身となった少女は……まぁ、語りにくいから割愛するが、共に旅に出た」

割愛？　今までほとんどを包み隠さずに話していたというのに？　気のせいか、目の前の少女の顔が赤い。……聞くのは野暮か。

「その旅は、少女にとっての衝撃であった。なにせ今までの一平穏／常識を捨て、危険／非常識を招き入れる事になるのだから。しかし……少女は１つだけ学ぶ事が出来た」

『世界は美しくなどない。だが輝いてる』という事をーーー

Ｓｉｄｅ　エヴァ

最初は話の意図が読めずに怪訝な顔をしていたラウラだが、段々と話の内容を理解してくれた様だ。今まで真面目な顔で私の話に聞き入ってくれていた。

「……すまんな。長々と独り言を呟いてしまって」

私がそう言うと、彼は両目を閉じて息を吐き、ふたたび目を開いて私に言う。

「いや、構わん。だが一つ聞かせろ」

「む、何だ？」

「その少女は……今、幸せなのか？」

そう、真剣な表情でこちらに訪ねてくるラウラ殿。幸せなのか？

か……。

「ククッ。そんな答え、１つしか無かろう」

「ほう？　では」

「あぁ、そうだな……」

そして私は不敵に微笑み、ラウラ殿に告げてやる。

ーーーー当たり前だろう？

その後、ラウラ殿が私を雇ってくれたのは言うまでもなかろう。

外伝「エヴァの旅～the　Beautiful　World～」（後書き

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあと
がき

作「特に言う事ないな、作者です！」

神「特に以下同文。神伽だ」

柚「（以下同文）言わせてくださいよ！　柚です！」

作「いきなりだけどさ、この作品って書く気なかったんだよね」

柚「じゃあ、なんでまた？」

作「感想が5件も来て突発的に。およそ3時間で書いてみた、だか
ら穴だらけ」

神「よくこんな厨二臭いテンプレ文章載せる気になるな。恥ずかし

くないのか？」

柚「まぁまぁ……」

作「では、空言天狐さん、カレーパンさん、ＲａｉＮさん、清浦刹那さん、Ｗｈｉｔｅ　Ｓｅａｌさん。感想ありがとうございました」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「ちなみにあと数話続きますよ、この外伝。更新は明日以降ですけど」

外伝・?「エヴァの旅～the　Unexpected　Truth」（前

作「清浦刹那さん、感想ありがとうございました」

神「今回も外伝か」

柚「あとがきで私の出番が！」

作「今回は1時間で書いたので本格的に内容薄いです」

外伝・?「エヴァの旅～the　Unexpected　Truth」

ふむ、第2話だな。……？　私は何を言っているんだ？
最近はクエストをたくさん受けていたから疲れたのだろうか。今度、休暇でも貰うとしよう。

さて。私は今、オスティアのギルド『宵闇の鈴』に所属している。そこでギルドランクAAとなったのだ。

ギルドランクとは、そのギルド内での強さのランクの事だ。強さとしてはSS、S、AAA、AA、A、B、C～とZまで続いている。最初は皆Zからだが、そこは真祖の吸血鬼である私だ。半年もあればHまで上り詰めるというギルド初の偉業を成し遂げ、その2ヶ月後にはAAまで上がった。

これは世界で最も早いランクアップらしく、何度か帝国から『騎士就任』等で呼ばれる事があった。しかし私はそれらを全て断った。理由としてはあの男ーー私にこの呪いをかけたーーが帝国に所属していたからだ。

だから私は帝国にあまり良い感情を抱いていない。逆にオスティアや連合からの名誉は貰っておいたが。その際に私が賞金首である事が発覚したので、それは秘密裏に行われた。

「さて……次はどのクエストを受けるか。なになに、『闇ギルドの討伐　５０万ドラクマ』『古竜種の角の蒐集　素材報酬』『家庭教師　時給１２００ドラクマ』『恋の悩み　プライスレス』……」

最後の方がおかしかった気がするがきっと気のせいだろう。気にせず私は依頼を選ぶ。

「これにするか。『幻の月夜桜の発見　８００万ドラクマ』」

選んだ理由か？　……報酬が高いからだ。悪いか？

仕方ないだろう！　ここ最近は報酬の８割を解呪の研究につぎ込んでいたのだから！　この忌々しい術式を解くためなのだ！

……落ち着け私。よし、依頼人のところへ行くか。

この時の私は、この依頼で運命の出会いが待ち受けていることを、まだ知らなかったーーー

「ここか……」

ようやく依頼人の家についた。

何故か辺境の地にあって、ギルドからここに来るまでに3時間もかかってしまった。地図が無ければおそらく迷っていたな…。

家の中に気配を感じ、私は戸をノックする。すると中から表れ

たのは頼りなさげな雰囲気の眼鏡をかけた中年だった。

「はい、どちらさーーー！！」

ん？　固まってしまったぞ。ど、どうすればいいんだ？

私が少しの間困惑していると、相手の男はハッとしてこちらの肩を掴んでくる。

「お嬢様！　エヴァお嬢様ですか！？」

ーーー何？　この男、何故その名を……。いや、お嬢様だと？

「……マンフレッド？」

「おぉ！　やはりお嬢様でしたか！　そうです、マンフレッド・ベルホーンです！　マクダウェル家に仕えさせていただいていたマンフレッドです！　お久しぶりでございます……！」

急に泣き崩れてしまったマンフレッドに対し、私はただ困惑していた。久しぶりに昔の知り合いに会えた喜びも確かにある。だがしかし、

ーーー何故、ここにいる？

「マンフレッド……。何故、お前は生きているのだ？」

その問いに、マンフレッドは少しビクッと体を震わせてこちらを見る。

「……そうでしたね。お嬢様はご存知なかったのでしたね」

まるで何かを隠しているかの様な物言いに私は引っかかりを覚え、再びマンフレッドに問うた。どういうことだ、と。それを聞いた後マンフレッドはポツポツと語り始めた。マクダウェル家の呪われた出自をーーー

マンフレッドが語った内容は私にとっての衝撃だった。

マクダウェルの家は元々吸血鬼の家計で、稀に先祖返りを起こして吸血鬼の力を持った子が生まれるという事。実はマンフレッドもマクダウェルの家系、分家の様なもので、吸血鬼だという。

そして私はマクダウェルの家計で最も吸血鬼の力を色濃く受け継いでいるという事。しかしそれを是としなかった私の両親がその力を封じたという事。

そして今まで私は、あのアンベッサ・A・カステルが私に真祖の術式を使用したのだと思っていたのが間違いだったと知る。彼はただ封印を解いただけであるというのだ。

……ハハ。なんだそれは、私の今までの数百年が馬鹿の様ではないか。解呪など出来るはずもない、私は生まれながらの吸血鬼なのだから。

「……そうか」

しかし私の口から出る言葉にはなんの感情も籠もらない。籠もらせる事が出来ない。私の今までを否定された様な気がしたから。

「はい。それでお嬢様には告げておきたいことがあります」

真剣な顔となって私に向き直るマンフレッド。しかし私はそれすらも気にすることが出来ずにただ聞き流す。

「お嬢様。マクダウェル家には代々、『忌み名』というものが御座います」

忌み名？　ククッ、『忌むべき名』か。私には相応しい響きじゃないか。

そう自虐的な思いに耽るが、マンフレッドの次の言葉によって私の意識は戻された。

「『忌み名』というのは、吸血鬼として産まれた者に付ける名です。吸血鬼として産まれた者が不自由をしない様に、親がその子供を守るため、別姓を名乗るための名なのです」

子を、守るための、名ーー？

一瞬だけ、ことばの意味が理解できなかった。しかしすぐに気

付き、反芻する。両親が私のためにつけてくれた名だという事実を。

「それは、本当か？　　本当なのか、マンフレッド……」

「えぇ。お嬢様の名を考える時は、ご主人様たちに私も加わらせていただきましたから」

「教えろ！　　マンフレッド、私の名を！」

思わず感情が昂ぶり、マンフレッドのしわくちゃのスーツの胸ぐらを掴む。するとマンフレッドがゆっくりと口を開き、告げる。

「アナタシア・キティ……。不死の子猫、という意味です。『何時までも子猫のように可愛らしく幸せに』という意味を込めて……」

その言葉を聞いた私は、思わず涙を流してしまい、マンフレッドに抱きついたーーー

外伝・?「エヴァの旅～the　Unexpected　Truth」（後

あとがき特別編『柚の追跡日記』

追跡1日目

今日から私はジンガさんの下を離れるエヴァンジェリンさんの後を追っていきます！

……なんか犯罪チックな匂いがするのは気のせいです、そうにちがいありません。

追跡3日目

今日は賞金狩りの人たちを追い払ってお金を得ていました。

あぁ・・・あんなに小さいのに見栄を張って偉そうな言葉を使ってます。それが余計に幼く見えていることに本人は気付いていないので、みんな放置してますけど。

それにしてもとてもたくましくなって・・・ジンガさんが見たら悲しみそうです

女の子らしさは大切なんですよ？　元・貴族なのに、このアウトローの似合いっぷりは何なんでしょう？

P．S．寝言でジンガさんの名前を呼んでいたのを聞いて、少しジンガさんに神罰を送ってしまいましたが気にしません

第１０話「魔女との邂逅～あれ？　３人目じゃね？～」（前書き）

柚の追跡日記

1ヶ月目

最近、エヴァンジェリンさんは変わってきました。最初は淡々と賞金狩りを迎え撃っていたのですが、だんだん嬉々としてきました。

……なんでしょう。そのうち戦闘狂とかになって理性無くして、どっかの冬の森にあるお城で雪の妖精に召喚されるんでしょうか

激しく不安を覚えた日でした

6ヶ月目

もうエヴァンジェリンさんの資金がヤバイです。なまじ不老不死の吸血鬼、しかもサバイバルの経験豊富（ジンガさんの影響です……）なもので生活費がかかりません。もう国と張り合えるレベルの金額抱えてます。影の倉庫に入ってるので場所も取りません

それでもエヴァンジェリンさんには足りないみたいです。なんでも「吸血鬼の呪いの解呪にお金がかかる」とか。

どんだけー、です。

第１０話「魔女との邂逅～あれ？　３人目じゃね？～」

３話ぶりに俺、登場！　ふふふ、きっと俺のファンも今頃「ジンガキターーーーー！」等と弾幕コメントが張られていることだろう。余は満足じゃ～。

メタメタな発言？　ふっ、知ったことか！　どうせ俺の考えなんて誰にも理解でき……いや、千雨ちゃんならいけるのか？　あの子オタだし。

うん、原作始まったら関わるわ。久々にオタトークしたいし、ツッコミが欲しい。

だって柚はツッコミしてくれないし、エヴァちゃんは激し過ぎるし……（ツッコミがだぞ？　変な想像した奴には『極光（ジャッジメント）の断罪者』）。

アーウェルンクスはボケに気付いてくれないし……いや、俺が「ツッコまないのかよ！」って言った時に「？」って小首かしげる

のはひっじょ〜〜〜に可愛かったが。

リズはリズで俺より人生経験豊富だから、流されたり被されたりするんだよね。ほぼ勝てん、稀に勝てるけどさ。

むっ？　そんな説明はいいから早く話を進めろ？　やれやれ、しょうがないなぁのび太（駄目ニート）くんは。

「という訳で状況説明を始めようか」

「？　如何したんだい？」

「アーウェルンクス、気にしてはいけないわ。気にしたらつけあがるから放置が良策よ」

うわーんヒドイよー！　リズがイジメる～！　助けてアウェえもーん！

「おっと。あぁ、よしよし。あのお姉さんは怖い人じゃないからね……フフッ」

「……何よ。私が悪いみたいじゃない」

いやお前が悪い！　もしそう思った読者さんがいたらコメントをよろしく！　……決して感想を催促してるんじゃないんだから！

「はいはい、ツンデレ乙。あとジンガはいい加減アーウェルンクスから離れなさい。アーウェルンクスもそんな簡単に受け入れないの、あなたは女の子なんだからね？」

ん？　……あー、そういやそうだっけ。いかんなぁ、原作で男だったから男同士のノリでやっちゃったよ。

「……」

おろ、アーウェルンクスさんや？　何をこっち見てポーッと

してらっしゃる？　あぁ早く離れろって言いたいのね、わかります。うん、俺みたいなキモ男に抱きつかれていい気分な訳ないしね。失念してました。

まったく俺は馬鹿だなぁ。アーウェルンクスは優しい子なんだから、直接的に「離れて」なんて言い難いのに。そこを察してやれないのがまた、俺のキモさに拍車をかけるねぇ～。

「……なんだか、また勘違いしてそうね」

「さて、立ち直った（？）ところで」

「いきなりだね」

「それがジンガクオリティ。んで、とりあえずどっか行きたいとことかある？　まずリズから」

ただ今、前話でも言ってたけど宿屋です。あれから1晩たちました。……部屋？　もちろん別ですが？　俺なんかと一緒にねｔ（ｒｙ

まぁとにかく今後の方針を決めようとしてるところだ。俺としては行きたいところとかあるけどな、この2人が行きたいところの方が優先度が上だ。

「私は、そうね。魔法世界は見飽きたから旧世界に行きたいわね」

ふむふむ。なら俺の目的と被るから問題ないな。

「んじゃアーウェルンクスは？」

俺が聞くと少し悩んだ素振りを見せ（といっても本当にわかりにくいけど）、少しの間を置いて答える。

「ボクはーーーーうん。君と一緒なら、何処でもいいよ」

「「……」」

はっ！　思わず意識を手放してしまった！　見ると俺と同じようにリズも固まっていた。

い、いや、だってさ！？　反則だよ、これ！　顔を赤らめて俯いてボソッと言うんだよ！？　ヤヴェ……マジで可愛い。あやうく理性の鎖から放たれてどこまでも堕ちて魔性がざわめく檻へと行くところだった……！

くっ、裏の人格が！　影羅が来るっ！　……厨二乙。

「……？　ど、どうしたんだい、いきなり」

「いやぁ、ね。……アーウェルンクスかわえぇなぁ～、と思ってさ」

「か、かわ……！？」

「私も激しく同意するわっ！」

「うん、とりあえずリズは落ち着け。確かに可愛いけどさ」

はぁ。コイツの悪いくせが出た。コイツ、某キャス子（狐にあらず）みたいに可愛いもの好きなんだ。特に女の子とか。今まで何人の犠牲を見てきたか……おぉ、こわいこわい。

てかアーウェルンクス大丈夫か？　顔赤くして俯いちゃって。あ、俺に可愛いって言われたのが気持ち悪くて吐き気を我慢してるのか？　うーん、悪いことしたな。じゃ、お詫びに……

「大丈夫か？」

俺はそう声をかけて背中をさすってあげる。気持ち悪いなら気持ちよくしてあげないと。……エロく考えた奴、あとで体育館裏な。

「え、あ、うん。大じ」

そうしてこちらを振り向くと同時、アーウェルンクスの顔は一瞬ポカンとした状態になり、

ボンッ！

一気に真っ赤になって、表情が変わる。そして爆発でもしたのかと疑うほどの湯気が顔から出て後ろに倒れ……っ！

「うお！　ど、どうした！？　風邪か！？」

いかんな、医者に連れてったら人形だってバレ……る訳ないか。じゃあとりあえず病院へ！

「ジンガ？　アナタ、それ本気で言ってるの？　冗談よね？」

は？　冗談？　何が？　……あぁ、俺の顔が冗談みたいに酷いって話しか？　そんなの言われんでもわかってるっつーの。

「……もういいわ」

何だ？　変な奴だな。

結局、アーウェルンクスは「大丈夫よ、問題ないわ」と言うのでベッドに寝かせた。リズはそのままつきっきりにさせて、俺は明日の出発のために買い物をして時間を潰した。

そして翌日、ゲートを抜けイギリスへ。俺やリズは賞金首（ちなみにリズは『黒い月（ケエス・ビュトス）』で有名らしい。賞金は２８００万）なので、変装していった。リズは少し幻術で大人の姿に、俺はナーサリーライムの持つスキル『変身』を使って肉体を変化させる。やべ、マジ便利。

そしてここはイギリスの街道。ゲートポートからは皆徒歩なので俺たちも当然徒歩だ。２時間ほど歩き、のどかな村や森に山などが見える平和な場所。

そこを歩いていると向こうから多数の人間が騒いでいる声が聞こえてくる。

「あら、何かしら？」

「さぁ～、また阿保な騒ぎじゃね」

「とりあえず行ってみるかい？」

放置する訳にもいかないし、ってかもろに進行方向なんで通らざるを得ない訳でして。俺たちは騒ぎへと向かう。

すると向こうから1人の女の子とたくさんの人が手に手に武器を持ちながら追いかけて来る。……なんだ？

そう思っていると、追いかけられていた少女が俺の後ろに隠れ、大人（っつーか男しかいねぇ）達が俺の前で足を止める。

「おい、そこの！　今すぐに後ろの女を渡せ。そうすれば命だけは見逃してやる」

……は？　何を仰ってやがりますかこのお方は？　頭沸いてるの？　馬鹿なの？　死ぬの？　疑問符を多用するほどに俺は呆れてますよ？

「……理由を聞いても？」

「貴様の後ろの女は魔女だ！　だから磔にして火にかけねばならん！　わかったなら、さっさと去れ！」

おーけーおーけー。コイツ等が基地外だってのはわかった。

何ですか、１８００年代に魔女狩りですか。……古っ！　いや、歴史的には間違ってないのかもしれんけど古い！　魔法世界じゃそんなもんとっくにねーよ。あ、ここが田舎だからか。うん、なら仕方ない。

ふと後ろの少女を見ると、俺の服を掴んで目を瞑りプルプルと震えていた。そして彼女の額にある『それ』に気付いた。……よーっし、抹殺☆決定♪　そう思った後、俺は男達に向き直って告げる。

「ーーー逆らうな。貴様らの分子は砂になって消えろ」

瞬間、目の前の男達は俺の言葉通りに砂となって散った。隣でアーウェルンクスが驚いているけど、リズは「またか」みたいな顔をしている。まぁ、そこらへんは付き合いの差だね。

ちなみに何をしたかってーと、複写眼を使ったんだよ。ほら、伝勇伝の１巻でライナが暴走した時にやってたやつ。

まぁ詳しいことはおれも知らんよ？　だって俺2巻までとアニメの15話までしか観てないから。色々な事象に干渉・改竄みたいな感じじゃね？　って思ってる。それでアイツらの身体の分子を砂に変えただけ。もちろん死んでます、某砂鰐さんやひょうたん背負った忍者と違って操れませんから。

「……？　あれ、いない……」

お、よーやく落ち着いたか？　とりあえずそう思って声をかけてみる。

「大丈夫か？　もうあの大人たちはいないからね～」

ナデリナデリと頭を撫でる。髪サラサラだなー。

「あっ、ありがとうございます……？」

すると隣のアーウェルンクスが正気に戻り、こっそりと耳打ちしてくる。

（君はいったい何をしたんだい？　また何かトンデモ技かい？）

（失礼な。ただアイツらの身体の分子を砂に変えただけだぞ）

（……やっぱりトンデモ技じゃないか）

いかんなー。あんなのでトンデモとか言ってたらリズはどうなる？　世界を滅ぼす魔法とか使えるぞ？　柚に至ってはそれよりも上だ、仮にも神ですから。

「ジンガ？　何故あの人たちを、こほん。追い返したのかしら？　別に話し合いでも良かったと思うけれど」

俺が「消した」とは言わずに「追い返した」と言い直すリズ。うむ、流石に空気を読んでくれて助かる。

「まー、アレだ。アイツらさ、すっごい下卑た眼をしてたんだよね。それに男しかいないのも気になったし……。たぶん、この子差し出したら慰み者にされてたと思う」

その言葉に後ろで話を聞いていた女の子がビクッと身体を震わせる。怯えたような表情を浮かべるので、再び頭を撫でる。

「だいじょーぶだよー？　あの怖いおじさんたちはお兄さんがＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩして還したから（砂に）」

（今絶対にお話の意味が違ったわね……）

「だから、君の名前を教えてくれるかな？　良かったら君の家まで送り届けてあげるからさ」

そう言って俺は女の子の顔を見る。緑の髪の幼い顔立ちをした少女は、顔を上げて俺を見る。そうすることで額にある鳥のような模様がよく見える。

「……私は、Ｃ・Ｃ（シーツー）・って言います。あと親はいません……」

これが、C.（まじょ）C.との邂逅だった。

第１０話「魔女との邂逅～あれ？　３人目じゃね？～」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「１０万ＰＶ突破！　作者です」

柚「２万ユニーク突破！　柚です」

神「お気に入りが２００突破。神伽だ」

作「さって、それは早めに終わらして」

柚「良いんですか？　作者さん、６ケタ台に乗るの楽しみにしてたじゃないですか」

作「いやいや、目標はあくまで目標。超えたなら更に高みを目指すのさ！　ということで次は５０万だ！」

神「調子乗んな。……んで、何故にＣ．Ｃ．出した？　これで不老不死の魔女が３人も揃ったぞ？」

作「理由はない。なんか『イギリス行くか→ん？　コードギアス？→Ｃ．Ｃ．？　あ、時代的に良くね？』と思っただけ。ただそれだけ」

柚「最近、毎日更新する様になったと思ったら内容が薄くなりましたね～。元々薄いですけど」

神「駄作者の心に７０００のダメージ」

作「もうやめて！　作者のライフはもうゼロよ！」

神「知るか」

作「あぁ……そうだ。ちょっとアンケートです。実はこの作品、ネギまの後に違う世界に行こうと思ってるんですけど……ぶっちゃけ、今考えてるストーリーだと大戦で世界が平和になっちゃいます」

柚「なので！　そこで終わりにすべきかどうか？　というのを募集します！　いちおう作者さんもネギくんのストーリーは考えてあるので好きな方で良いですよ！」

神「良ければ次に行って欲しい世界などがあれば募集します。もしくは『それ以前にネギま世界だけで終われや』とか思う人はその旨を感想に書いてください」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「アンケートの締め切りは４月１５日が終わるまでです。応募がない場合は作者の独断。同票の場合は再度アンケートしますので」

第１１話「日本へＧＯ！　京都へＧＯ！」（前書き）

作「アンケートの結果はっぴょー！」

リリカルなのは　１票

ＩＳ　１票

バカテス　１票

ブリーチ　１票

Ｆａｔｅ　２票

ネギまの続き　１票

仲間の同行　２票

神「今のところはＦａｔｅに仲間を連れていく、が濃厚だな」

柚「ちなみにアンケートは何度でもＯＫです♪　同じのに票を入れなければもーまんたいです！」

作「とりあえず、Ｆａｔｅで希望があればどうぞ。第四次の（クラス名）でサーヴァントまたはマスター、第五次の（クラス名）でサーヴァントまたはマスターなど」

神「ちなみに第3勢力でも良いぞ？」

柚「過去に行くのもありです。ギルガメッシュの時代に友として、セイバーやランスロットの時代に騎士として～みたいなのもあればどうぞ！」

第１１話「日本へＧＯ！　京都へＧＯ！」

「遂に日本に到着だ！」

「ショウユの香りがするのだったかしら？」

「醤油だね、ボクは好きだよ。ＴＫＧは美味しかったな」

「てぃーけーじー、って何ですか？」

はいはい。上から俺、リズ、アーウェルンクス、Ｃ．Ｃ．の順番です。台詞の通り、俺たちは日本に到着しました。もちろん飛行機でだぞ？

うん、何故か存在した。歴史はわからんが、もっと後じゃなか

ったっけ飛行機って？　これも俺の影響？　というかご都合主義だろうか……

ん？　あぁ状況説明か。そうだねぇ、あの後、C．C．を助けた後の事だ。

聞いたところによると、C．C．は奴隷の身分らしくて雇い主に不老不死だと見破られたらしい。それで追われているのを俺が助けた。だからもう雇い主の所には戻れないし、このまま1人だと同じ事が起きる。そんな感じで俺たちに同行するらしい。

いやー、にしてもさ？　リズとC．C．が異常に仲良いんだよ。やっぱあれかね、『不老不死の魔女』繋がりで通じ合えるのかな？　もう名前を呼び捨てしてるらしいし。

「そうなんだー。リーゼリットも大変なんだね」

「えぇ……本当に。ジンガはまったく気付いてくれないのよね。でも鈍いわけじゃないのが、また性質が悪いのよ」

「へぇ～。でも、私も結構ジンガさん好きかな。なんていうか、安心できる。あの人に最初抱きついちゃったのは恥ずかしいけど……

でも、嫌な気持ちじゃなかったもん」

「あら、ライバル出現かしら？　フフフ……勝つのは私よ？」

「それは神のみぞ知る、だよ」

ん～……。何を話してるんだろ？　なんか聞いちゃいけない気がする、ってか聞く気はないが。女の子の話を盗み聞きとかあかんだろ。

「どうしたんだい？　もう皆行ってしまうよ？」

「あぁ悪い。ちょっちボーッとしてやした」

「そういうば聞いてなかったのだけれど、日本に来て何をするのかしら？」

リズが俺に質問をしてくる。ちなみに歩きながらです、ただ今京都歩いてます。認識阻害とか使ってるから怪しまれない……ふっ、完璧だ☆

「あり、言ってなかったっけ？　まぁぶっちゃけ、俺が知り合いに会いにきたかっただけなんだよね」

京都にいる知り合いですよ……うん、皆予測はつくだろう？
そう、アイツだ。今はアイツがいる場所へと向かっているところ。

「知り合い、ですか？」

「……君の知り合い、という事はトンデモなのかい」

アーウェルンクスの暴言にはもう慣れたさ！　それに、受け入れれば何だか気持ちい……はっ！　俺は何を！？　落ち着け俺、素数を数えるんだ。0……あっ。

「あら、知り合いという事はまさかアイツかしら？」

んー、リズは気付いたか。まぁ前にも会わせたしねぇ、酒飲みとして仲良くなったらしいぞ？

「そそ。ま、とりあえず行けばわかるさ！　迷わず行けよ！」

「「迷うのかい（迷うんですか？）」」

……2人とも、天然すぐるよ。ちくせう

さーて、Ｔｗｉｔｔｅｒ！　じゃなくてついたー！

ここはとある湖。原作で修学旅行でエヴァちゃんが出てきた所って言えば伝わるかな？　まぁもっと簡単に言うとーー

「うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ザシュッ、と言う音と共に俺は数メートル後退する。すると元いた場所には2メートル程の大剣が突き刺さり、地面が抉れていた。

そして先ほど声がしたほうを見てみると、そこには空中に浮かんだ人がいた。流しのような着物を着ており、顔立ちは野性味あふれる雰囲気を醸し出している。

「ジンガァァァァ！！　俺と勝負しやがれぇ！」

「へっ、相変わらずだな。ーースクナ」

飛騨の大鬼神と呼ばれた鬼、リョウメンスクナノカミが封印されていた場所だね……

Side　アーウェルンクス

……今、ボクは夢でも見てるんだろうか？

ボクの目の前で戦いが繰り広げられている……それだけならば別段珍しい事でもない。この時代において戦は当たり前の事だからね。

だけど、驚くのはその戦いのレベルだ。

片や、ワイルドな男性。何処からともなく様々な剣を取り出して投げつけている。その1発1発が山を吹き飛ばすレベルだ。先ほどから流れ弾（この場合は流れ剣かな？）が山に当たっているからよく分かるよ。

そしてもう片方。決して逞しく見えない男性、しかし細いわけではなく鍛えた感じを漂わせる。先ほどから相手が投げつける剣を手に取り、それで飛来してくる武器を捌く。脆くなれば新たに手に取りを繰り返している。……あの威力の剣を手に取って使いこなすなんてどこのバケモノなのだろう。

「アーウェルンクス？　如何かした？」

見ると、リーゼリットがこちらの顔を覗き込んでいた。ちなみに名前で呼ぶ事を許してもらえた。

「いや……この戦いのレベルの高さに呆れただけだよ」

先ほどからC．C．は「うわー！」だの「すごーい！」ばかり言っている……意外と肝が太いんだね。

「あぁ貴女は始めてだから仕方ないわよ。私だって今でこそ見慣れたけれど、始めて見た時は驚いたのだから」

へぇ……リーゼリットが驚く姿なんて想像できないけど。それほどの驚きが、この戦いには確かにある。

まず、山を破壊するほどの威力を衰えもせずに投げ続けられるのも異常だね。それにその武器を普通にキャッチして使いこなすなんて……うん。やっぱりボクの認識は間違ってないよ。

……あ。武器の男の攻撃が止んだね。どうやら武器が遂に無くなったらしい。そういえば何処に持っていたんだろうね？

ーーー何時かボクも、あの人の隣で肩を並べられる位には強くなれるのかな？

第１１話「日本へＧＯ！　京都へＧＯ！」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「明日から高校だ！　作者です」

神「春休み終了のお知らせ。神伽だ」

柚「気分はとっても憂鬱！　柚です」

作「ユウトさん、ユッキーさん、空言天狐さん、カレーパンさん、卯月さん、清浦刹那さん、感想ありがとうございました」

神「今回は特に進まなかったな」

柚「日本行ってスクナですか～。意外とスクナのキャラ化って少ないんですよね」

作「うん、まぁ女にすると収集つかなさそうだから男にしたけど」

神「お前、当初の予定では近衛家の近くの妖怪の山に行って伊吹萃香とか射命丸文とか出す気だったしな」

作「だって東方書きたいじゃないか！」

柚「まぁまぁ、もう1個の方を書きましょう。ね？」

作「へーい……」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「何度も言いますが、アンケートは何度でもＯＫです　期限は１５日が終わるまで、細かい要望もありです。詳しくは前書きを」

アンケートねぇ…

えーっと、アンケートなんですがね。

ネギまの続きとＦａｔｅが同票なんで、もっかいですね

期限は２２日が終わるまで、一度投票しててももう一度してほしいです

ネギまの続きｏｒＦａｔｅ。もしくは第３案でも可です

仲間を連れていけ、というのもありましたので、そういうのもありです

あんまり長く出来ないのでそろそろ終わります。ではでは…

以下、字数稼ぎ。２００文字って何ぞ

あかさたなはやらあさたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさ

たなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたなはまらわあああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああqqqqあああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ

第１２話「久々だぜ！　久々です！」（前書き）

ネギまの続き　２

大戦期と原作の間に別作品　１

Ｆａｔｅ　３

って事なんで、大戦終わったらＦａｔｅ行きます
詳しい要望があればどうぞ

神伽「ギルガメッシュの時代に○○、セイバーやランスロットにガウェインの時代で○○、メデューサの時代に○○などです」

柚「第五次、または第四次にサーヴァントまたはマスターとしてなどです！」

第12話「久々だぜ！　久々です！」

「くぁーー！！！　負けたーー！！」

「シュウネンガタリンゾ」

セメテイタミシラズヤスラカニシヌガヨイ……いや、俺は北斗知らんのだけど。なんかトキが強いらしいよ？　ジョインジョイトキィだっけ。アーケード版見たことないな～。

あ、とりあえずスクナに勝った。……まぁ別に今まで負けた事もないんだけど。302戦302勝0敗です、スクナ如きに負ける俺じゃありません（キリッ

とりあえずちょっとした説明な？　スクナが持ってる刀の事、あれは俺が作ったんだ。『刀語』の絶刀・鉋の頑丈さと斬刀・鈍の斬れ味と千刀・針の多さを兼ね備えた作品。ある種のチートだよ！

しかもスクナって『王の財宝もどき』が使えるらしくて、普段はそこに仕舞ってあるんだってさ。回収も自動らしい……チクショウ、生まれつきのチートめ！

「スクナもいい加減にしたら？　貴方ではジンガに勝てないのは分かっているでしょう？」

そう言うのはリズ。俺は紅き翼よりは強いから間違っちゃいねぇよ？　だって紅き翼ごときに負けてちゃダメだろ……いや、戦ったことないけどさ。

「いやなぁ、わかっちゃいるが止められないんだって！　もうどうにも止まらないんだよ！」

何処の歌だ？　そう思ったのは俺だけじゃないはず。

「なぁそうだろ？　画面の向こうの君たち」

「……如何したんだい？　いきなり虚空に向かって話しかけるなんて。頭でも打ったのかい？」

素直な感想どうもありがとう。……鬱だ、死のう。

「ち、ちょっとジンガさん！？　いきなり首筋に剣を向けて何を「グサッ！！」キャアアアアアアアアア！！！」

あ、C．C．が叫んでる。そら、いきなり目の前で自殺されたらそうなるか。仕方ねえな、よっこいしょ。

「じゃんじゃじゃーん。（不老不死だから）僕は死にましぇーん」

「え、えっ？　　えっ？　　……ええっ？」

「トンデモだね」

「それがジンガだもの」

あれ、ウケがイマイチだな？　　C．C．なんて状況についていけずに困惑してるし。……むぅ、もっとソフトなギャグにすべきか

「まぁ、とりあえずスクナとジンガはこっち来なさい。治療しないとダメよ？」

「いや、俺は不老不死だから」

「俺は神だからこんぐらい問題ねぇぞ？」

きっぱりと断る。なんか、リズの親切心には裏がありそうな気が

する。きっと間違いじゃないのさ、何故なら俺の経験談だもの！

するとリズはとぉっても良い笑顔でこちらに微笑んで

「死んだ方が楽だと思わせてあげましょうか？」

なんて事を仰りやがりました、このお方！　え？　俺とスクナ？　「あげま」の所ですでに土下座してたけど？　プライドなんてあの笑顔の前には安いものさ！

その後リズが「光よ、その輝きで傷付きし翼たちを癒せ……リヒトクライス」と言うと傷が治った。具体的には１５０００くらい回復した気がする。

そしてその後、特に何もなくスクナと別れた。だって本当に少し顔を見に来ただけだもの、手合わせもしたが。そんで京都の街並みを探索してた時のことなんだが、

……なんか、見たことのある女の子が壁から顔だけ出して尾行みたいな事をしてる。俺たちが後ろに立っても気付かないのは能力故にか集中のし過ぎか。はたまたただの天然なのか。とにかくこちらに気付いてもらおうと思い、肩に触れる。

「おーい？」

「何ですか、今私は忙しいので後にしてください」

む、あしらわれた。再ちゃれーんじ。

「こっち向けー、うぉーい」

「ですから、私は今忙しいんです。用があるなら死んでからにしてください」

いやいや、それどーよ。会えねーじゃん、いや、神なら会えるのかな。

「ゆーずー？」

「〜〜〜〜〜、何ですかさっきから！　私は忙しいって言って……る……ジンガさん？」

そう言って、ようやく目の前の小柄な少女ーーー柚はこちらに気付く。おせーよ、マジおせーよ。

「うぃっす、お久」

「あ、はい。お久しぶりです」

「んー、柚は何でここにいんの？　エヴァちゃんと一緒なんじゃなかったの？」

「あ、エヴァンジェリンさんが今あそこにいるんですよ」

と言って柚は少し先の家を指差す。　そこには「道場」と書かれた木製の看板があったので、何となく予測はついた。

「修行か」

「はい、何でも合気道・柔道・空手・剣道・忍術なんかを極めるためにこの国に来たらしいです。ちなみにそこは合気道の道場です」

忍術てオイ。いや、原作に楓とかいたから里くらいあるだろうけどさ。木の葉の里とかあるんだろーか。

「あの、ジンガさん？」

「うん？」

呼ばれたので振り返ってみると、少し困惑気味に俺と柚を交互に見ているC．C．とアーウェルンクスがいた。リズは顔見知りです。

「あ、C．C．にアーウェルンクス。こっちは柚、俺のパートナーで神様をやってる女の子だよ。柚、こっちはC．C．にアーウェルンクス。俺の新しい仲間たちだからね」

「「よ、よろしくお願いしゅ！！　あぅ……」」
「よろしくお願いするよ」

わー、柚とC．C．のセリフが被ったわ。確かにキャラが似てるっちゃ似てるし。書き分け大丈夫か、駄作者？

そしてそのまま柚と少し話し合ってから別れた。柚の今の役目はエヴァちゃんの監視だからね、離れさせる訳にもいかないのよ。

さーてとりあえず次は何処に行こうか？　次回はキンクリするかもね（笑）

第１２話「久々だぜ！　久々です！」（後書き）

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能ｉｎあとがき

作「やべぇ……スランプかもしれねぇぜ。作者です」

神「なんだか作品のクオリティーが更に下がったな。神伽だ」

柚「久しぶりに私の出番です！　柚です」

作「清浦刹那さん、カレーパンさん、空言天狐さん、光月さん、なおさん、ユッキーさん、うっかり者の慢心王さん、世界保険機関さん、感想ありがとうございました」

神「放置してたから溜まってるな……」

柚「仕方ないですよ、作者さんの家にはＰＣがないですから」

作「わざわざ婆ちゃんの家に行かないとなー。我が家にもＰＣあるけどパスワードロック掛かってるし」

神「脅威の２４桁パスワードロックだな」

柚「用心深いと言うかなんと言うか……ですね」

作「そして、前書きにも書きましたが世界はＦａｔｅになりました」

神「だから細かい設定の要望は受け付けてますので。今のところ確定は藤乃さん？　でしたっけ？　歪曲の魔眼持ちの人を助ける、っていうことだけ」

柚「だから月姫やメルブラでも受け付けてますよ？」

神「お前のフラグに」

柚「ブレイク・イン♪」

作「まぁ１ヶ月に１話は更新しますので、２月放置とかはないですよ」

外伝・?「エヴァの旅～Sage knight of betrayal～前編」

作「今回は、カレーパンさんの書いている『裏切りの聖騎士の力』とのコラボでござる。前編では出てこないけどね！」

神「なんで俺じゃなくてエヴァなんだ？」

柚「『オリ主と絡ませるとかマジテンプレ乙』と、作者さんは思ったそうですよ？」

作「そいや今更だけど、【ジンガが未だに原作などを鮮明に覚えている理由】と【元・一般人なのに戦闘できる理由】を書いてみようかと」

神「記憶の方は、アサシンのスキル『蔵知の司書』のお陰。刼の眼には何千何万という魂がいるからな。アサシンよりも記憶しやすい」

柚「戦闘の方は、フェリスの経験ですね。あと、刼の眼の中に居る人の経験や知識も引き出せるのでそれもです！」

作「櫛島　御道さん、清浦刹那さん、空言天狐さん、カレーパンさん、感想ありがとうございます。櫛島さんは誤字の指摘、感謝です」

神「それと、アンケに『ウラヌスやらガイアやら、それ以前に星すら存在しない時間からスタート』と『第五次に第三勢力として参入』がありましたが、どちらが良いですか？　？もちろん他の案があれば書いてくれて構いません」

柚「今回のあとがきは特別です！　？もし好評なら今後はこれでいくらしいですよ？」

「マンフレッド、いるか？」

？私はそう言いながら、ドアをノックする。
？すると中から足音が聞こえ、ドアの前で止まり、ドアが開く。
？我が家に仕えるーーいや、仕えていた、が正解かーー執事であったマンフレッドが笑顔で私を迎えてくれた。

「いらっしゃいませエヴァお嬢様。ささ、どうぞこちらへ」

？そう言い、マンフレッドはドアを手で抑えて私に道を譲る。

「だから、いい加減お嬢様は止めろと言っているだろう……」

？そうですね、と微笑みながらスルーするマンフレッドを横目に私は中に入る。
？この小屋は木で出来た丸太小屋なので、入る度に森をそのまま持ってきたかのような自然の匂いを感じる。小屋の外は森なのだがな。

「それで、マンフレッド？　？次は何をすればいいんだ？」

？私は、ソファへと腰を下ろし、マンフレッドに対して問う。

？皆は……ん？　？皆とは誰だ？　？

？……まぁ良い。コホン。

？皆は忘れているかもしれないが、元々私はここへは依頼で来たのだ。

？『幻の月夜桜の発見』という依頼だな。報酬に釣られたとは死んでも言うまい。死ねないが。

？そして、その依頼を私はこなした。何、真祖の吸血鬼からすれば

物探しなど造作もない。
?そろそろ私が「真祖」から「神祖」にレベルアップする日も近いな、フフフフ。

?方々に私の眷属であるコウモリを飛ばしたところ、遥か上空にある小さな浮島にその桜は咲いていた。
?……何故か兄様が「ラピュタか！」とツッコんだのが聞こえた気がした。

?兄様に会いたいものだな、兄様はギャルゲーの主人公や、何処ぞの不幸少年のようなフラグメイカーだからな。無意識とか性質悪すぎるぞ。

?む？　?私が何故ギャルゲーやフラグメイカーなどを知っているかだと？
?あぁ、それは兄様がいろいろと教えてくれたよ。兄様が転生者で姉様が神様だと言うのをな……初めは兄様の頭が沸いてしまったのかと本気で心配した程だ。

?まぁそれがきっかけで、未来の世界の漫画やアニメなどといったものを見せてもらった。
?正直、とても面白いと思う。今のこの世界には、娯楽なんてカードゲームやボードゲームくらいしかないからな。
?ちなみに私のお気に入りは「型月シリーズ」と「とあるシリーズ」だ！

?エミヤの人生に比べれば私の人生のなんと小さな事か、と本気で思った事があるほどだ。
?そういえば兄様は第二魔法の担い手らしいな、宝石翁とは出会ったら即バトルな間柄らしい。
?ちなみに宝石翁は実在したらしい。……夢が広がるな、私はアルク達に会いたい。

?と、盛大に話が逸れてしまったな。今はマンフレッドの話を聞くとしよう。
?ちなみに思考時間は2秒だ。私は吸血鬼なのだし、エルトナムの高速思考・並列思考ならばマスターしたぞ。

「えぇ、次はですね。えー、何処にやりましたかね。ここ、でもないですし。あそこですかね……あ、ありました。これです」

?私達の間にある机に、マンフレッドは写真を置いた。
?そこに写っているのは、鮮血の様に美しく咲く花だった。

「これは、アネモネか？　?いや、ここまで紅いのは初めて見る……」

??アネモネとはキンポウゲ科イチリンソウ属の多年草の名だ。
??語源はギリシア語の「風」を意味し、神話に出てくる美少年アドニスが流した血より産まれたと言われているらしい。

？？それ故、稀にアドニスと呼ばれることもあるとか。
？？ちなみにアドニスはフクジュウソウ属の学名でもある。

「えぇ、それは確かにアネモネの花なのですが……。少し、特殊なのです」

「少し特殊？　？どういうことだ？」

？？私がマンフレッドを見つめながら聞くと、マンフレッドは一拍置いてから、私に答える。

「ーーー人の血を吸っているのですよ、そのアネモネは」

「……何？」

？？思わず眉をしかめる。

？？アネモネという花は人を殺す様な食人の性質はなかったはずだ。
？？毒性は持っているが、皮膚炎・水泡を引き起こす、などの症状だったはずだ。
？？それが何故、人の血を？

？？そう思っているとマンフレッドは私の対面の位置にあるソファに座り込む。
？？

「最近の話なのですが、お嬢様は『血染めの華』という男をご存知ですか？」

「……名前ならば聞いたことはある。賞金７５０万ドラクマの賞金首、冷酷で無表情な男だという情報以外は広まっていないのは、ひとえに彼が全ての者を殺すからだと。……知っているのはそれくらいか」

？？私がそう言うと、マンフレッドは満足げに頷き、話の続きを進める。

「その男なのですが、どうもお嬢様を探しているらしいのです」

「私を？　？何故だ？」

？？不意に私の名前が出たことにより、少し動揺しつつも聞き返した。
？？
？？何故ここで私の名前が出る？
？？そもそも私の関係者は目の前のマンフレッドと兄様と姉様以外はいないはずだ。
？？
？？悪の魔法使いとしての頃に殺してしまった相手の親族という可能性もあるが、その線は薄いな。
？？そもそも賞金稼ぎとはなりたくてなるのではなく、ならざるを得なくなる職種だ。
？？故に、家族がいるような人物ならば賞金稼ぎにはなるまい。なので却下。
？？なら一体……？

「その人物が、この近辺に出現したらしいのですよ。おそらくお嬢様の所在がバレたのでしょうね」

「確かに、その可能性は高いだろうな。相手の目的が分からない以上は大人しく、出会わないように祈るだけか」

？？もしかしたら私の抹殺が目当てなのかもしれない。
？？帝国からの刺客という可能性も十分にあり得る話だ。

「その事なのですが……。お嬢様には、その男に接触していただきたいのです」

？？……は？

？？マンフレッドは今なんと言った？　？

？？血染めの華と接触しろ？　？私を狙っている男と？

「マンフレッド……お前は頭が湧いているのか？　？バカなのか？　死ぬのか？」

「酷い言われようですな。しかし今回ばかりは仕方ないでしょうね……ですが、是非にもお願いしたいのです」

「何故だ」

？？私はマンフレッドを睨みつけてそう聞いた。

？？そうして返ってきた返答はとても嬉々とした感情を含んでいたのが感じ取れた。

「彼の名の由来は、彼が殺した死体の側に、必ず血に染まったアネモネが置かれていることだそうです。お嬢様には、そのアネモネを蒐集してきて頂きたいのです」

？？……何故こうなった。

？？私は今、オスティアの中心部である繁華街、その更に中心の噴水の広場にいる。

？？理由か？　？血染めの華をおびき出すためだ。
？？マンフレッドによれば、血染めの華は私を狙っているようだからな。なるべく目立つ場所にいればすぐに接触して来るだろう。

？？懸念事項としては、彼が街中でいきなり仕掛けてくるような破綻者であったらという可能性。

？？しかし、彼は私と同じで襲撃者のみを殺しているというのを聞いた。
？？ならば無関係な人々を襲うような事は無いだろうと踏んでのこの行動だ。

「しかし、来ないな……。街の中心部の目立つ場所、更には魔力を垂れ流している状態だというのに。やはりマンフレッドの情報はガセだったか？」

？？この街にいた、ということ自体が勘違い。
？？むしろその方が可能性が高い。
？？なにしろ高額の賞金首だ、見つかれば面倒な事になるのは目に見えているからな。
？？

？？まぁ、向こうは私と同じくらいには実力があるらしいしな。
？？国ごとき相手にならないだろう、それこそ英霊とまではいかなくとも外道マーボー神父くらいの強さがなくては。

？？そんな事を考えながら、私は影の倉庫からＰＳＰ（兄様が作ってくれた、手先が器用だな）を取り出してＦａｔｅ／Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｃｏｄｅｓをやろうとした瞬間ーーーー来た。

？？それはとても強大な存在感を発しつつ、しかしこの場の誰よりも目立たずに歩んできた。
？？矛盾しているのかもしれないが実際そうだ。
？？おそらく本物の強者にしかわからないだろう気配、空気、感覚。
それをその男はなんの抑制もしていなかった。

？？外見は黒髪、長身でスラッとしていて一見強そうには見えない体つき。
？？しかし彼のオーラが、氣が、魔力が彼の強さを物語っている。
？？顔も特筆する様な所は何もなく、見た目だけならば其処らの一般人と変わらないだろう。
？？鎧も武器も杖も、何も持たない男を、私は今、心底恐ろしいと思ってしまった。

？？そうしてその男は私の目の前に来、噴水に腰掛けている私を見下ろした。

「……貴様、闇之福音……？」

？？ひどく低い声で。

？？単語しか発さずに。
？？ギラギラとした獣の様な目で。
？？溢れそうな殺気を抑えつつ。
？？私に話しかけてくる。

「……そうだ。それで？　？『血染めの華』殿が、この私に何用かな」

？？あぁ、彼の目は何処かで見た事がある。
？？狂気に満ち満ちた、自分の大切なもの以外は如何でも良いと言わんばかりの瞳。
？？そんな瞳を私に向けて、彼は私に告げた。

「……貴様、愛（あいして）。我共在（われとともにあれ）」

？？

？？

外伝・?「エヴァの旅～Sage knight of betrayal～前

デュナミス（以下デ）「デュナミスと」

ゼクト（以下ゼ）「ゼクトの」

デ&ゼ「「不完全な世界コーナー！！」」

デ「さて、いきなり作者の思いつきで始まったという謎コーナーの司会を任されたデュナミスだ」

ゼ「同じく。司会を任されたゼクトじゃ」

デ「で？　？何なのだ、このコーナーは」

ゼ「うむ、あとがきがマンネリ化してきたらしくての。何かないかと考えた挙句がこれじゃよ」

デ「……作者はアホなのか？」

ゼ「それはもはや疑いようのない真理じゃな。それでこのコーナーの説明じゃが」

デ「タイトルで分かる人はいないと思うが……いわゆる、質問コーナーだな」

ゼ「作者自身のミスや誤字などを晒したりもして笑いを取るのが作者の思惑らしいぞ」

デ「無理だろう？　？まず作者には文才が足りぬ。それに作者にはシリアスは向いていないのに、エヴァの旅だなどとシリアス風味なのを書くからお気に入りが5件も消える。そんなだから我の出番がないのだ」

ゼ「1話しか出番がないからといって拗ねるでない。お主はおそらく終盤では出るじゃろ」

デ「……貴様は紅き翼に加わるから我よりも出番が多いと思うが？」

ゼ「サッ（目を逸らす）」

デ「フフフフ、良いのだよ。どうせ私なぞ端役だ、原作でも少年に

負けてしまったという体たらくだからな……。作者は単行本派だから３４までしか読んではおらんしな」

ゼ「セクストゥムがあまりにも可愛過ぎて萌えた、と言っておったのぅ。１番目の見た目はテルティウムと同じの予定じゃったがセクストゥムｖｅｒにするらしいぞ？」

デ「それで良いのか、作者……。そんな調子で大丈夫か？」

ゼ「大丈夫とは言えんの、問題だらけじゃ。先を見据えぬ物ほど早くに消えるのはあまりにも有名じゃぞ」

デ「まぁ作者が不人気になろうが我等には関係ない」

ゼ「儂らの出番がなくなるがの」

デ＆ａｍｐ；ゼ「「……」」

デ「ま、まぁ作者も頑張っているしな。読者の方々よ。感想、評価、お気に入り登録、レビューをしてやってくれ」

ゼ「そ、そうじゃな。儂らの存在もなくなってしまうので、そうし

てくれると非常に助かるぞ？」

デ「クロス先も受け付けている。今回カレーパン殿とのコラボで味を締めたらしいからな」

ゼ「それから質問、誤字ももちろん受け付けておる」

デ「では、僥倖と共に在らんことを」

ゼ「何処ぞのゲーム実況者のセリフじゃな。最近は言わなくなってしまったがの」

軽いアンケート

えぇ、まぁ、エヴァの旅についての話なんですがね？

この後、中編、後編と続く訳なんですが

転生者を出すんですよ、えぇ

もちろん勘違いなお方で、エヴァをハーレムに的な事を考えてます

それでですな。なんか良い能力ないかな～、と

テンプレ的なのを提案してほしいです、はい

例えばエミヤの投影、とあるの一方通行、アンサートーカー、悪魔の実を全て、異常と過負荷、東方の能力全て、曲玄糸や音遣いなどなど

→のどれかにしてくれ、って言うのでも良いですよ？

これ以外にも良いのがあったら採用しますし

なんかマニアックなのでも構わなかったり

某作家さんは、「魔王」というマンガの「腹話術」というスキルを千雨に持たせておりましたw

スイマセンね……今書いてるんですけど、転生者の能力に詰まりまして

最初は投影の予定だったんですけどね、なんだかなーと思いまして

締め切りはそうですね……8日の水曜日になった瞬間に締め切ります

ではでは、あんけーとヨロシクお願いします

すんませんしたあぁぁぁぁーーー！！

投稿したと思ってたら投稿されてなかったあぁぁぁーー！！

しかも下書き消しちゃったし……今必死で記憶引っ張り出して書き直してます

なのですいません。今テスト週間なんで書く時間少ないですんで、来週にはうpします

楽しみにしてくれた方がいたら、本当にすいませんでした！

今は5分の2くらい書いたとこですかねぇ……

ちなみにコレは次話を投稿する時に消しやす

以下、字数稼ぎ

あかさたひまやらわあしたなはまやらわあかさたなはまやらわあか

さたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたなはまやらわあかさたひまやらわあかさたなはまやらわあしかたなろわたまかわたみわさやこわぁわまたあやあやかわな、たからわあまか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9596p/

チートなオリ主で原作ブレイクするのはとても楽しい本能

2011年9月14日00時33分発行